

# Creative Agingのための文化政策

Cultural Policies for Creative Aging

本稿においては、高齢者および高齢者が抱える社会的課題に対応する文化政策を「Creative Agingのための文化政策」と名付けた。そしてはじめに、超高齢化社会となった日本における「Creative Agingのための文化政策」の現状を分野ごと（美術、演劇、音楽、小説、俳句、映画）に概観した。また、米国における「Creative Agingのための文化政策」の事例を整理した。続いて、英国における先進事例を概観したうえで、スコットランドにおける高齢者のアートフェスティバル“Luminate”の現地調査の成果をとりまとめた。

これらのリサーチのまとめとして、Creative Agingの取り組みを、「高齢者の関与方法（主体か客体か）」および「活動の場（高齢者施設の内部か、外部での活動か）」という2つの軸により、4つの象限に分類した。そしていくつかの先進的なプログラムは、それぞれの象限から滲み出していき、軸線のボーダーを越境していくかのような活動が特徴となっていることを指摘した。

最後に、日本における、これからの「Creative Agingのための文化政策」に関して8つ政策提言を行った。この8つの提言とは、①全国的なフェスティバルの開催およびプラットフォーム的な組織の設立、②対象とする芸術分野の拡張、③全国の公民館をCreative Agingセンターに転換、④全国の温泉を高齢な芸術家のレジデンス施設に、⑤日本版CCRC（Continuing Care Retirement Communityの略語）における「文化」プログラムの導入、⑥介護報酬のクリエイティブな改定、⑦福祉・介護予算の1%を文化芸術に、⑧Creative Agingを2020オリンピックのレガシーに、である。



Here, the phrase “cultural policies for creative aging” is used to refer to cultural policies that target senior citizens or address the social issues they face. This paper starts with an overview of the current state of such policies in Japan, a super-aging society, for the areas of fine art, theater, music, novel, haiku, and film. Cultural policies for creative aging in the United States are also summarized. The paper then outlines examples of advanced policies in the United Kingdom and summarizes the result of a field study of Luminate, an aging-themed art festival in Scotland. To summarize the research findings, activities for creative aging are divided into four quadrants based on two criteria: how senior citizens are involved (i.e., actively or passively) and where activities take place (i.e., inside or outside senior care facilities). It is noted that some advanced programs cannot be contained within a single quadrant and extend over multiple quadrants. The paper concludes with eight policy proposals on Japan’s future cultural policies for creative aging: (1) organizing national festivals and establishing a platform organization, (2) expanding the types of art to be included, (3) transforming community centers nationwide into “creative aging centers,” (4) turning hot-spring inns nationwide into residence facilities for senior artists, (5) promoting the introduction of cultural programs in continuing care retirement communities, (6) creatively modifying the compensation system for care providers, (7) allocating one percent of the welfare and nursing budget to cultural and artistic activities, and (8) making creative aging one of the legacies of the 2020 Olympics.

# 1 | はじめに

## ①日本の高齢化

よく知られている通り、日本の65歳以上の高齢者の数(老年人口)は、2010年時点の国勢調査では2,948万人という結果であったが、団塊世代が高齢化する2012年に3,000万人を上回り、その後2042年に3,878万人でピークを迎えると推計されている。また、老年人口の割合を見ると、2010年時点では23.0%となっていたが、その後出生中位推計によると、2035年に33.4%で3人に1人を上回り、2060年には39.9%、すなわち2.5人に1人が老年人口となると推計されている。これは世界のどの国も体験したことがない超高齢社会である。

また、厚生労働省の「平成26年簡易生命表」によると、日本人男性の平均寿命は80.50年、女性の平均寿命は86.83年であり、日本は世界有数の長寿国となっている。かつて「余生」と呼ばれた老後の時期は、「第2の人生」とでも呼ぶべき長期間にわたることになるのである。

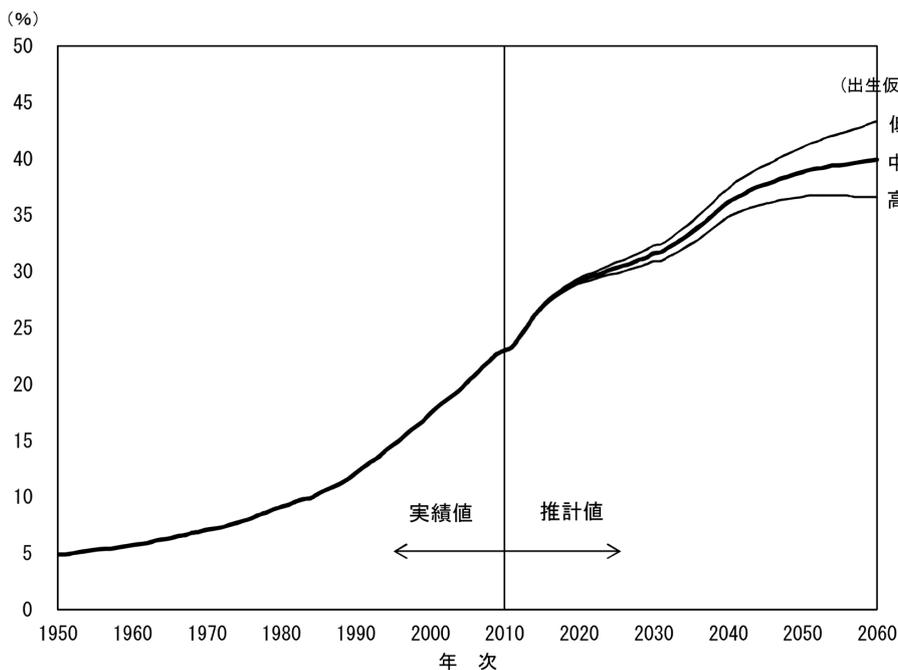
## ②高齢化が生み出す社会的課題：a. 下流老人

生活困窮者支援を行うNPO法人ほっとプラス代表理事で、社会福祉士の藤田孝典の著書『下流老人』は、2015年の新語・流行語大賞にもノミネートされた。この「下流老人」とは、「生活保護基準相当で暮らす高齢者およびその恐れがある高齢者」のことである(藤田2015:5)。そして2015年現在、下流老人は日本国内に推定600万~700万人いるとされる(藤田2015:6)。

実際、厚生労働省「国民生活基礎調査」のデータをもとに年齢層別・男女別に貧困率を見ると、現役引退後の概ね65歳以降において貧困率が高まっていることが分かる。また、女性の貧困率は男性よりも高く、高齢期になると両者の差は更に拡大する傾向が見られる(図2 年齢層別・男女別相対的貧困率(2010年))。

そして、「現在の若者や中年層における非正規労働者を中心とした低所得層の増大は、現在よりも深刻な老人の貧困を将来もたらすだろう」と悲観的な予想がなされている(大竹&小原2016:89)。

図1 老年人口の割合の推移(死亡中位推計)



出所：国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成24年1月推計)」<sup>1)</sup>

もちろん、貧困という社会的課題そのものは一朝一夕に解決できる問題ではない。そして、この「貧困」という社会的課題は、「社会的孤立」という別の課題を生み出しているのである。

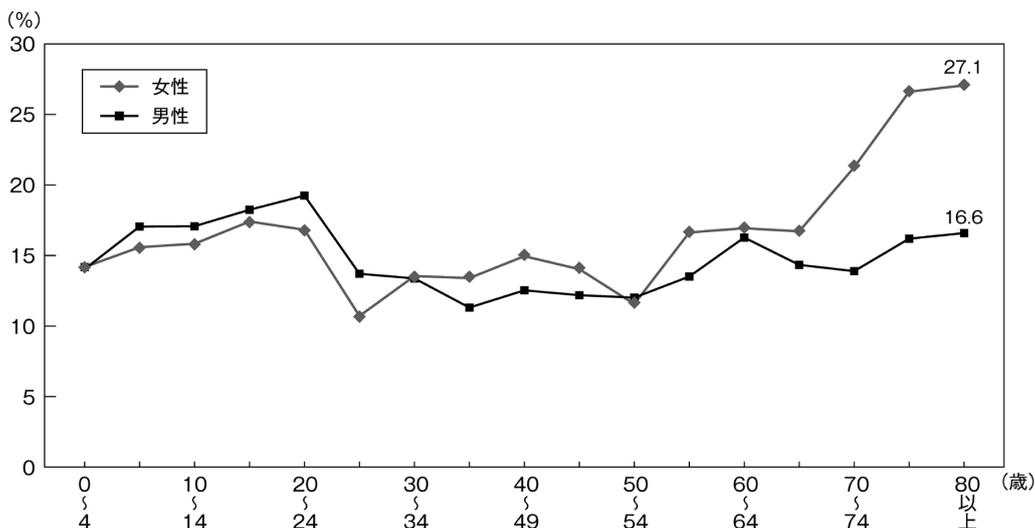
先行研究によると、「貧困者は非貧困者に比べ、約4倍の確率で社会的孤立の状況となっている」と報告されており、貧困であることは「社会的交流の欠如のリスクを高

めている」と分析されている(阿部2014:26)。

### ③高齢化が生み出す社会的課題：b. 社会的孤立

60歳以上の高齢者の(電話やEメールを含めた)会話の頻度を見ると、高齢者全体では毎日会話をしている者が9割を超えるのに対して、ひとり暮らし世帯については会話の頻度が低下しており、特に男性の単身世帯では、「2～3日に1回」以下の会話の頻度にとどまっている者

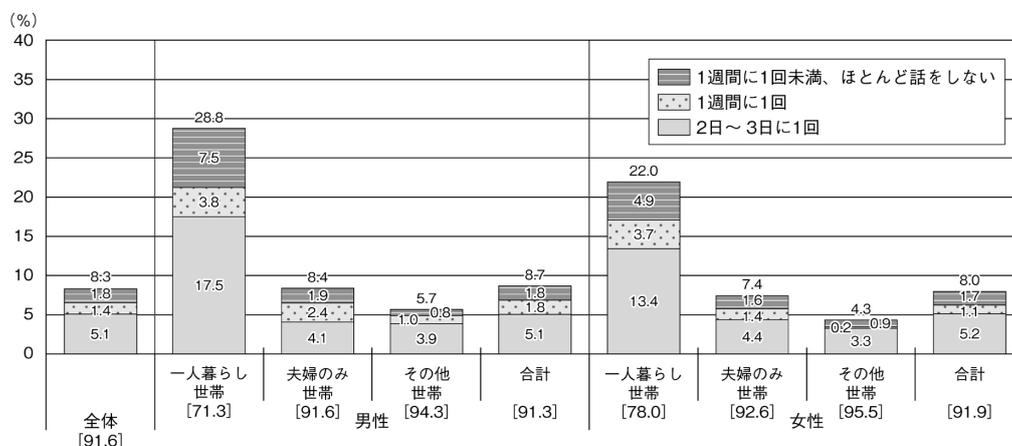
図2 年齢階層別・男女別相対的貧困率(2010年)



(備考) 厚生労働省「国民生活基礎調査」(平成22年)を基に、内閣府男女共同参画局「生活困難を抱える男女に関する検討会」阿部彩委員の特別集計より作成。

出所：内閣府男女共同参画局「平成24年版 男女共同参画白書」<sup>2</sup>

図3 高齢者の会話の頻度(電話やEメールを含む)



資料：内閣府「高齢者の経済生活に関する意識調査」(平成23年)

(注1) 対象は60歳以上の男女

(注2) 上記以外の回答は「毎日」または「わからない」

(注3) [ ]内の数値は「毎日」と答えた者の割合

出所：内閣府「平成27年版高齢社会白書」<sup>3</sup>

が約3割(28.8%)に達している。

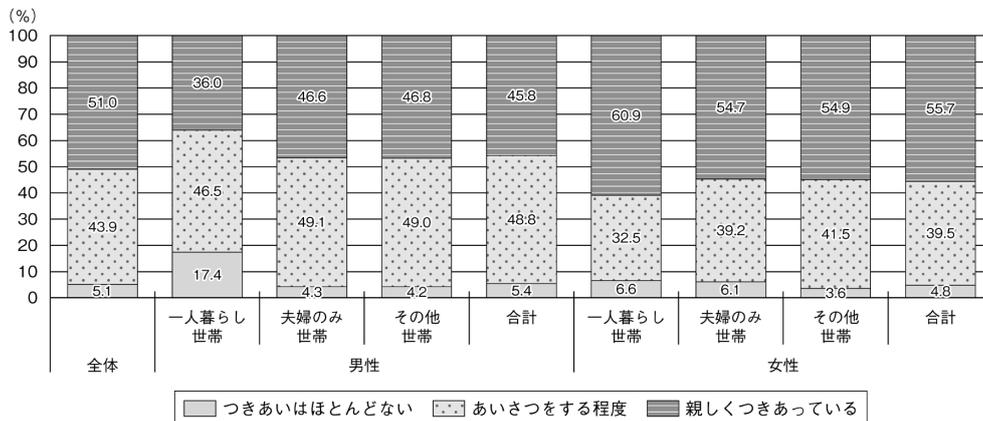
また、高齢者の日常の近所づきあいの程度についてみると、全体では「つきあいがほとんどない」は5.1%にとどまっているのに対して、男性の単身世帯では「つきあいがほとんどない」という高齢者が多く、17.4%を占めている。

高齢者の仲間づくりにおいて、従来は全国に設置されている「老人クラブ」が一定の役割を果たしてきたものと考えられる。しかし、高齢者数は増加しているにもか

かわらず、全国の老人クラブの会員数は1998年度末に887万人で最大であったものが(公益財団法人 全国老人クラブ連合会2014:8)、2015年の3月末には606万人となっており、この16年間で3割強となる281万人も減少している<sup>4</sup>。

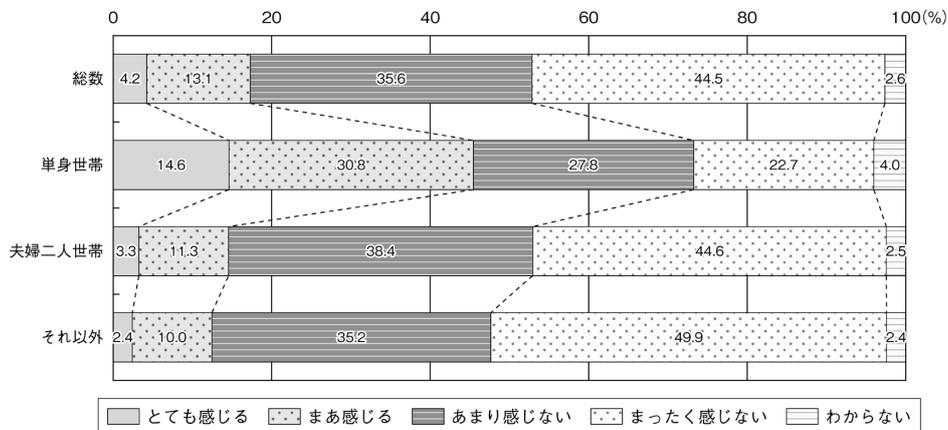
そして最新の研究によると、こうした高齢者の社会的孤立は、糖尿病による高血圧のリスク増大以上に、高血圧に悪影響をおよぼすという結果となっている(Yang et al.2016:578)。

図4 近所づきあいの程度



資料：内閣府「高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査」(平成22年)  
 (注)対象は60歳以上の男女  
 出所：内閣府「平成27年版高齢社会白書」  
 (http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/html/zenbun/s1\_2\_6.html)

図5 孤独死を身近な問題と感じる高齢者の割合



資料：内閣府「高齢者の健康に関する意識調査」(平成24年)  
 (注)対象は、全国60歳以上の男女  
 \*本調査における「孤独死」の定義は「誰にも看取られることなく亡くなったあとに発見される死」  
 出所：内閣府「平成27年版高齢社会白書」<sup>5</sup>

さらに、いわゆる「孤立死（孤独死）」、すなわち、「誰にも看取られることなく、亡くなったあとに発見されるような死」に関しては、身近な問題だと感じる（「とても感じる」と「まあ感じる」の合計）高齢者の割合は、全体では2割に満たなかったが、単身世帯では半数近く（45.4%）に達している。

#### ④高齢化が生み出す社会的課題：c. 老いともなう認知症

「認知症」は「老いともなう病気」のひとつとされる。「認知症」とは、「さまざまな原因で脳の細胞が死ぬ、または働きが悪くなることによって、記憶・判断力の障害などが起こり、意識障害はないものの社会生活や対人関係に支障が出ている状態（およそ6か月以上継続）」を指している<sup>6</sup>。

厚生労働省の研究によると、全国の65歳以上の高齢者における認知症の有病率は15%と推定され、2012年時点で462万人と推定されている（朝田2013：14）。また、認知症の前段階と考えられているMCI（Mild Cognitive Impairment）<sup>7</sup>の有病者は、2012年時点で約400万人と推定されている（ibid.：9）。つまり、認知症とその予備軍を合算すると、高齢者の4人に1人も占めることとなる。

また、厚生労働省の別の研究によると、認知症の患者数

は時代とともに増加することが予想されており、2025年に約650-700万人、2040年に約800-950万人、2060年に約850-1150万人に達するとの結果となっている（二宮2015：6）。

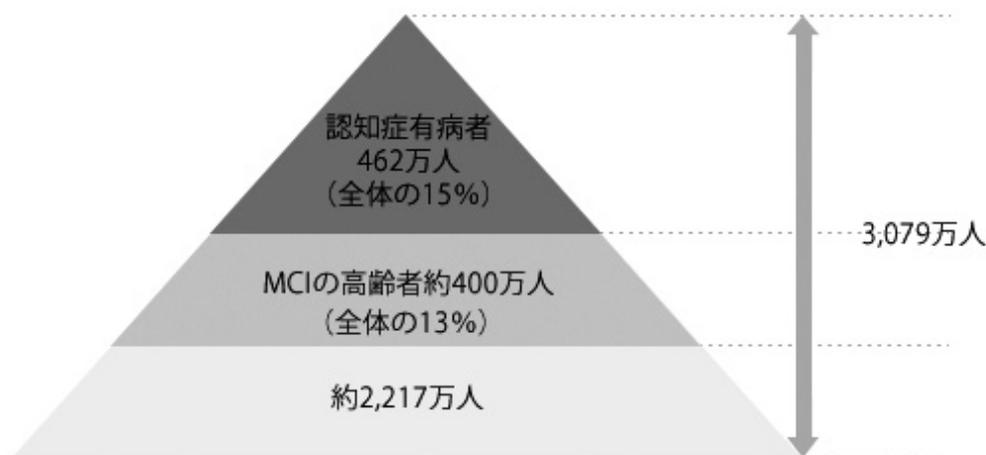
そして、認知症の増加にともなって、認知症の医療費や介護費等の直接費用をはじめとして、本人や家族の労働生産性損失等、目に見えにくい費用までを含んだ社会全体の費用も増大していくこととなる。慶應義塾大学医学部の研究によると、2014年の日本における認知症の社会的費用は年間約14.5兆円に上ると推計された。また、2060年の認知症の社会的費用は24兆2,630億円に達すると推計された<sup>9</sup>。

認知症は国際的な課題にもなっている。2013年12月、ロンドンで開催されたG8サミットにおいて各国の厚生大臣も招待され、認知症をテーマとする初めてのサミット「G8認知症サミット（G8 Dementia Summit）」が開催された。同サミットは、世界的な課題である認知症に各国が協力して取り組むために開催されたものである。

また、上述した慶應義塾大学では、世界経済フォーラム（WEF）と共催で、国際会議「認知症社会における経済的挑戦と機会」を2015年10月に開催している。

本研究は、こうした高齢化とそれともなう社会的課

図6 高齢者における認知症（2012年時点の推計）



出所：内閣府「政府広報オンライン もし、家族や自分が認知症になったら 知っておきたい認知症のキホン」<sup>8</sup>

題に対して、文化政策がどのように応答できるのかを探ることを主な目的としている。もちろん当然のことではあるが、アートによって高齢化が生み出す社会的課題がすべて解決できるわけではない。ただし、高齢にともなう社会的課題のうち、社会的孤立や認知症に関しては、アートが一定の役割を担うことができるのではないかと筆者は考えている。

そこで本稿においては、高齢者および高齢者が抱える社会的課題に対応する文化政策を「Creative Agingのための文化政策」と名付け、日本および諸外国における現状を把握したうえで、今後の可能性について検討してみたい。

## 2 | 日本における Creative Aging 政策の概況

### ① 国の取り組み

ところで、文化庁の政策においては、「高齢者」はどのように位置づけられているのであろうか。文化政策の基本指針となる「文化芸術の振興に関する基本的な方針－文化芸術資源で未来をつくる－（第4次基本方針）」（2015年5月22日閣議決定）を見ると、「(3) 基本的視点」に掲げられた7つの項目のうち、「公共財・社会包摂の機能・公的支援の必要性」という項目において、「文化芸術は、子供・若者や、高齢者、障害者、在留外国人等にも社会参加の機会をひらく社会包摂の機能を有している」と記述されている。

また、「第3 文化芸術振興に関する基本的施策」の中で、「高齢者、障害者等の文化芸術活動の充実を図るため、次の施策を講ずる」と表現されている。この施策のうち、高齢者に関係する部分について見ると、「文化芸術活動の公演・展示等において、高齢者、障害者、子育て中の保護者、外国人等が文化芸術を享受しやすいよう、施設のバリアフリー化、字幕や音声案内サービス、託児サービス、利用料や入館料の軽減など対象者のニーズに応じた様々な工夫や配慮等を促進する」および「高齢者、障害者、子育て中の保護者等の文化芸術活動を支援する活動を行う団体等の取組を促進する」となっている。ただし、こうし

た方針に基づいて、高齢者を対象とする具体的な政策が体系的に実施されているというわけではない。

一方、高齢者福祉政策を所管する厚生労働省では、高齢者が主役のスポーツ・文化の祭典として「全国健康福祉祭（愛称：ねんりんピック）」を厚生省創立50周年に当たる1988年から毎年開催している。この「ねんりんピック」は、スポーツや文化種目の交流大会をはじめ、健康や福祉に関する多彩なイベントを通じ、高齢者を中心とする国民の健康保持・増進、社会参加、生きがいの高揚を図り、ふれあいと活力ある長寿社会の形成に寄与することを目的としている。そして、囲碁や将棋等の文化交流大会、地域文化の伝承活動や生きがいづくり等の活動を行う老人クラブ連合会等の代表者による実演や展示を行う地域文化伝承館等の文化イベント、世代間・地域間交流をはかる音楽文化祭等が開催されている<sup>10</sup>。

次に、日本の法制度および政策における高齢者の位置付けを概観してみたい。

まず1963年に「老人福祉法」が制定されている。同法は、老人の福祉に関する原理を明らかにするとともに、老人に対し、その心身の健康の保持および生活の安定のために必要な措置を講じ、もって老人の福祉を図ることを目的としているが、「文化」についての言及はない。

高齢化に関する国際的な取り組みに目を転じてみると、1982年に国連が「高齢化に関する国際行動計画」を策定している。この中で、「高齢者が余暇活動に参加し、自由時間を創造的に過ごすことを推奨するため、各国政府並びに国際機関は、高齢者が文化施設（博物館、劇場、オペラハウス、コンサートホール、映画館など）をより利用しやすいようにするためのプログラムを援助すべきである。さらに、文化センターが高齢者のために、そして高齢者とともに工芸、美術、音楽などの講習会を開催するように要請されるべきである。そこでは、高齢者は観客としても出場者としても積極的な役割を果たすことができるものとする」（仮訳）<sup>11</sup>としている。

1995年には日本で「高齢社会対策基本法」が制定された。同法は、高齢社会対策の基本理念を明らかにして

その方向を示し、国をはじめ社会全体として高齢社会対策を総合的に推進していくことを目的としているが、同法においても「文化」についての言及はない。

また、1996年7月5日に閣議決定された「高齢社会対策大綱」においては、「国民の多様化し、高度化する学習ニーズに対応するため、民間事業者の健全な発展の促進を図りながら、公民館、図書館、博物館等における社会教育の充実、美術館等における文化活動の推進、スポーツの振興などにより、情報通信も活用しつつ、生涯にわたる多様な学習機会の提供を図る」<sup>12</sup>と記述されている。

一方で、2002年に国連は「高齢化に関するマドリッド国際行動計画2002」を策定した。その目標のひとつとして、「社会的孤立を抑止し、自立を支援するための戦略として、高齢者による市民活動や文化活動への参加を推進する」<sup>13</sup>と記述されている。

高齢者を対象とする文化施策は、一般的に「子ども、障害者、高齢者」と三題噺のようにまとめて記述されるケースが多いが、これらのうち、「子ども」および「障害者」については、それぞれさまざまな施策や事業が展開されているのに対して、「高齢者」に関しては、「シニア割引」に代表される鑑賞支援以外は、今までほとんど手つかずの領域であった。また、高齢者を対象とした文化事業に関しては、吉本(2011)をはじめ、いくつかの事例が報告されているが、その全体像を概観する研究は現時点ではなされていない。

日本が世界に先駆けて超高齢社会に突入したこと、そして、誰もがいずれは高齢者となることを勘案すると、高齢者を対象としたCreative Agingのための文化政策について研究する意義と緊急性はとて高いと考えられる。

そこで、本稿においては、英国等、諸外国における先進事例研究と日本における現状の取り組みを概観した後、Creative Agingの類型化を試みる。そのうえで、今後の日本におけるCreative Agingのための文化政策に関する提言を行うこととする。

## ②美術分野

日本のアート(美術)分野におけるCreative Agingの取り組みは、体系だった文化政策として実施されているわけではないが、従前よりさまざまな団体や施設において展開されている。以下において、その代表的な事例を整理する。

### ■「私と町の物語」(2003年～2016年)<sup>14</sup>

「私と町の物語」という展覧会は、東京都港区の青山、赤坂、白金台、麻布、六本木という東京における最も変化の激しい地域で暮らしてきた人々の昔の1枚の写真とそれにまつわる個人の人生の物語についてインタビュー活動を通して集め、それらの写真と物語を展示するという企画展である。コミュニティ・アート・プログラム等を企画・制作するMuse Companyによって、2003年から2016年まで計8回開催されている。

そして、この展覧会にあわせて、高齢者に焦点を当てたプログラムも実施されている。2003年は、アーティストのJeanie Finlayに作品が委嘱された。同氏の代表的な作品は、英国サウスダービシャーに住む4人の高齢者のリビング・ルームをパノラマ状のデジタル・イメージで描き出し、見る人が自由に部屋の中を訪問し、彼らの話を聞くことができるというもので、2002年のキャン・デジタル・クリエイターズ・コンテストにも入賞している。同氏に対する委嘱作品『Home-maker』(2003年)では、港区に住む高齢者の方々の家を訪問し、インタビューを通してその方々の人生とホーム(家庭、住まい)を描き出すという内容であった。

また2004年には、白金小学校の4年生と詩人の谷川俊太郎氏が白金台の高齢者を訪問して、その体験をもとにして詩を創作した。これらの谷川氏と子供たちの詩がデジタル展示されたほか、谷川氏と子供たちによる朗読パフォーマンスも行われた。

### ■「古い 老いをめぐる美とカタチ」(2005年)

福島県立博物館では、「古い」というものは、ともすればマイナスイメージが強調されがちではあるものの、これを避けて文化・社会の成熟はありえないとの認識の

と、「老い」をめぐるさまざまな美とカタチを展示する企画展「老い 老いをめぐる美とカタチ」を2005年に開催した。同展においては、さまざまな「老い」の姿の表現として、現代作家のやなぎみわの「My Grandmothers」シリーズや折元立身の「ART MAMA (アート ママ)」シリーズ等が展示された<sup>15</sup>。

#### ■「快走老人録」および「快走老人録Ⅱ」(2006年、2014年)

これら2つの展覧会は、滋賀県近江八幡市の「ボードレス・アートミュージアムNO-MA」で開催された企画展である。同館は、障害者の作品と一般のアーティストの作品をボードレスに展示する企画展を開催していることで全国的な有名なミュージアムである。

2006年に開催された「快走老人録～老ヒテマスス過激ニナル～」は、歳をとって、逆にありのままの余生を爆発させ、時には若いころより過激に過剰に自己表現のボルテージを上げて花開かせる、そんなパワーを持つ作品およびその作者にスポットを当てた展覧会であった<sup>16</sup>。アーティストとしては、計7名が出展している。

2014年に開催された「快走老人録Ⅱ～老ヒテマスス過激ニナル～」は、2006年の展覧会の第二弾であり、NO-MAの開館10周年を記念して開催された特別企画展でもある。そして同展は、これまで経験したことのない超高齢社会を迎えた日本の現状を、「アール・ブリュット」というコンセプトで見つめ直した展覧会となっている<sup>17</sup>。アーティストとしては、後述する折元立身のほか、計6名が出展している。

#### ■「マイ・アートフル・ライフ」(2008年)

川口市立アートギャラリー・アトリアにおいては、2008年度の春の企画展として、人生半ばより独学で絵を描き続けた丸木スマ、塔本シスコ、石山朔の3人を取り上げた「マイ・アートフル・ライフ」を開催した<sup>18</sup>。

丸木スマ(1875年～1956年)は、「原爆の図」で知られる画家・丸木位里の母親であり、70歳を過ぎて絵を描き始めた「おばあちゃん画家」として有名であった。その作品は、丸木美術館(埼玉県東松山市)で見ることがで

きる。

塔本シスコ(1913年～2005年)は、本展覧会の2年前に開催された「快走老人録」(上述)にも作品が出展されていた。また、石山朔(1921年～)についても、本展の前年に横浜市BankART1929において「石山朔～O sole Mio」が開催されていた。

#### ■「回想法アート(ライフレビューアート)」(2009年)

愛知県豊川市では、2009年11月～12月に同市の桜ヶ丘ミュージアム開館15周年記念特別展として「境界なきアート展 ～響きあうココロへ～」を開催した。同展においては、いわゆる「アウトサイダーアート(アール・ブリュット)」および「児童画(チャイルド・アート)」のほか、認知症予防に効果的とされる回想法をアートに取り入れた「回想法アート(ライフレビューアート)」が紹介されていることが特色となっていた<sup>19</sup>。この「回想法アート(ライフレビューアート)」とは、「高齢者などの人生を聞き取り、美術家が作品化することで、高齢者が人生を振りかえる契機となり、新たな希望を見出す」とともに、「作り手である美術家は壮大な人生ドラマを作品化することで、新鮮な感動を表現する機会」を得ることを目的としたアート活動のことである<sup>20</sup>。

#### ■秋山祐徳太子個展「高貴骨走」(2010年)

秋山祐徳太子(1935年～)は、1970年代の東京都知事選挙への立候補等で有名な現代美術作家である。

日本の医療保険制度では75歳以上を「後期高齢者」と名付けているが、秋山祐徳太子は自らが「後期高齢者」となったときに、これを「高貴高齢」と読み替えて、個展「高貴骨走」をAISHO MIURA ARTS(当時は東京都新宿区)にて開催した。

なお、秋山祐徳太子は、本展開催の2年前に、自らの老いを明るく描くエッセイ『天然老人』を上梓して話題となった。

#### ■前衛★R70展(2010年)

「前衛★R70展」は、戦後、前衛美術の先駆者として日本の美術界を切り拓き、同展開催当時も旺盛な活動を続ける、70歳以上の美術家6人による新作展で、ギャラ

リー 58 (東京都中央区銀座) にて開催された。

展覧会の名称の「R70」のうち、「R」は「Restrict = 制限」の頭文字、つまりR18指定(18歳未満禁止)ならぬ、70歳未満禁止=70歳以上だけが参加できることを意味している。また、「前衛」と「R70」の間にある「★」には、2つの意味があり、ひとつは、美術界のスター、憧れのスターという意味で、もうひとつは現在進行形でキラキラと輝き、発光し続けている星、という意味である。

参加したアーティストは、上述の秋山祐徳太子のほか、『老人力』(1998年)を上梓し、同書の題名が翌1999年にかけて流行語となった赤瀬川原平(1937~2014年)等計6名で、展示する作品はすべて、2010年制作の未発表最新作であった。

ギャラリー58の長崎裕起子は、「この6人には、『老人』『おじいちゃん』という形容はあてはまらないと思っています。他の何ものでもない、揺るぎない個性を放ち、半世紀以上走り続ける、真の美術家6人です」と述べている<sup>21</sup>。

#### ■瀬戸内国際芸術祭 (2010年、2013年、2016年)

『「島のおじいさん、おばあさんの笑顔を見たい。」—そのためには、人が訪れる“観光”が島の人々の“感幸”でなければならず、この芸術祭が島の将来の展望につながって欲しい。ということが、このプロジェクトで当初から掲げてきた目的=『海の復権』です<sup>22</sup>と瀬戸内国際芸術祭の目的として記述されている(瀬戸内国際芸術祭実行委員会2015:1)。

また、同芸術祭の総合プロデューサーである福武総一郎氏は、自らが芸術祭を実施している理由として「過疎地の高齢者の笑顔、元気をつくるためだ」と説明している(長畑&枝廣2010:139)。

同芸術祭を実施した成果として、「地域の話や活気が生まれ、人びとの交流、地域づくり活動などが活発になる効果が確認された」(中島2012:86)と報告されている。そして、「過疎高齢化という最大の難題に対して、大きな成果をあげた」(中島2014:94)のは、男木島であったと分析されている。男木島においては、「過疎高齢

#### 図7 再開された男木小中学校

(レジーナ・シルベイラ「青空を夢見て」)



出所：筆者撮影 (2016年3月)

化を緩和するために住民が最も望んでいた、若い家族のUターンが実現した。その結果、男木小中学校の再開が実現した」(ibid.:101)のである。この再開された男木小中学校の外壁は、ブラジル出身のアーティスト、レジーナ・シルベイラによる、瀬戸内の青い空と光をイメージの源とした作品「青空を夢見て」となっている。

なお、こうしたアート・プロジェクトのあり方に関しては、一方でさまざまな批判も挙げられている。たとえば、アーティストの川俣正は、地方のアート・プロジェクトの現状に対して「目的性だけでアートプロジェクトが見られるところもあって、結果を出すのがあまりにも早く、安っぽいなってしまうのです」(熊倉2014:318)と語っている。また、評論家の藤田直哉は、アートがコミュニケーションの生成に関わるものに変化していくことに対して、「そんなに簡単に有用になっていいのか」(藤田2014:246)と問題提起を行っている。そのうえで、こうした動向に関して同氏は、「芸術が芸術という固有の領域であることに期待されていた、現世を越えたある種の力を、失うことにはならないか。世界を全的に変えてしまうような鮮烈な力を、失うことにならないか」(藤田2014:253)と檄を飛ばしている。

#### ■inner landscapes (2011年)

inner landscapes展は、3人のアーティストとフィ

ンランド・トゥルク市に住む9人の高齢者による、陶芸・写真・サウンド・ビデオからなる展覧会である。

この展覧会は、アーティストたちがトゥルクの高齢者たちにインタビューを実施して、昔のアルバム写真を収集するとともに、それにまつわる思い出やストーリー、個人的なエピソード等をヒアリングするという、コミュニティ・アート・プロジェクトを通じて実現された。

参加アーティストのうち、日本人のアーティスト・ユニット(崔聡子と蔵原智子)は、ハンドメイドの陶製ボウルを製作し、それにトゥルクの高齢者たちが持っていた写真をプリントした。こうした試みは、「個人的な体験を集積的な記憶の世界へ変換させる試み」と評価されている<sup>23</sup>。

なお、本展覧会は欧州文化首都「トゥルク2011」の一環として実施された。「欧州文化首都(European Capital of Culture)」とは、EU加盟国の2都市が協力しつつ(当初は1都市)、1年間を通じてさまざまな芸術文化に関する行事を開催する、という制度である。この「欧州文化首都」は、ギリシャのメリナ・メルクーリ(Melina Mercouri)文化大臣(当時)の提唱により発足し、幕開けとして1985年にアテネ(ギリシャ)で開催された。「欧州文化首都」の目的は、ヨーロッパの文化の豊かさや多様性を表現することにより、ヨーロッパ人たちを相互に結びつけるとともに、世界との相互理解を深める機会とすることである。換言すると、EU統合においては、政治的・経済的な統合だけではなく、文化面での協調が重要な役割を果たす、という考えがその背景にある(太下2014a:173-174)。

#### ■シルバーアート(2014年)

広島県福山市の「鞆の津ミュージアム」で2014年に開催された「花咲くジイさん～我が道を行く超経験者たち～」は、他人からの評価や対価にとらわれることなく、長年自らの衝動のままにやりたいことを一貫してやり続け、高齢になってもその勢いを失わない人たちによる表現を集めた展覧会である。たのしく強烈に生きてきた彼らの姿を通じて、年を重ねてなお力強い「老人」の生き方

を示している。同展においては、漫画家・蛭子能収や発明家・ドクター中松のような有名な人から、これまで世の中に紹介されることのなかった無名の高齢者まで、総勢12名の「花咲くジイさん」たちが紹介された<sup>24</sup>。

また、同展の展示をもとに、さらに取材・撮影を重ねて、翌2015年に書籍『シルバーアート 老人芸術』が制作・発刊された。

#### ■Of the Old, With the Old, for the Old Art After Tatsumi Orimoto<sup>25</sup>(2014年)

第56回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展(2015年5月9日～11月22日)の日本館キュレーター選出のために、国際交流基金によって実施された指名コンペティションにおいて、東京国立近代美術館主任研究員の保坂健二郎氏が提案した展示企画が、“Of the Old, With the Old, for the Old Art After Tatsumi Orimoto”である。

この企画案で中核となっていたアーティストは、現代美術家の折元立身である。折元は、2001年に開催された国際美術展ヴェネツィア・ビエンナーレにおいて、同ビエンナーレの総合監督を務めたハラルド・ゼーマンが企画した展覧会「人類のプラトー」に、唯一の日本人アーティストとして選定されたこと等で、国際的な脚光を浴びるアーティストである。

折元は、早い時期から高齢者の介護とアートを結び付けて、自ら介護する認知症の実母をモデルとして作品を制作し続けてきた。たとえば、折元の代表的な作品として、母親を被写体とした「Art Mama」シリーズ、エルビス・プレスリーの曲でノリノリになりながら母親のオムツを実際に交換するという映像作品「プレスリーのオムツ替え」(2013年)等が挙げられる。ちなみに折元の作品は、上述した「古い 老いをめぐる美とカタチ」(2005年)、「快走老人録Ⅱ」(2014年)にも展示されており、高齢者とアートという分野における第一人者として評価されていることが理解できる。

### ■「2240歳スタイル～時間を味方にする人生の先輩たち～」<sup>26</sup> (2016年)

展覧会「2240歳スタイル～時間を味方にする人生の先輩たち～」が秋田県立美術館県民ギャラリーにおいて、2016年3月9日(水)～21日(月)まで開催された。同展覧会は、秋田市が迎えている超高齢社会の今とこれからについて考えるきっかけとするため、全国で地域づくりに取り組むstudio-Lと秋田市により、「高齢化」をテーマとして開催された展覧会である。29人の高齢者の暮らしを取材して、その生活の有り様について「衣」、「食」、「住」、「元気」のテーマに分けて、データや写真、展示パネル、そして実際の高齢者の持ち物等が展示された。

### ■特定非営利活動法人芸術資源開発機構 (ARDA: アルダ)「アートデリバリー」

「アートデリバリー」とは、アートを必要としている所へアーティストを派遣するプロジェクトで、1999年から特定非営利活動法人芸術資源開発機構 (ARDA: アルダ)によって実施されている。同年、ARDAが企業メセナ協議会の支援による「ドキュメント2000」プロジェクトに参加し、杉並区文化・交流協会と共催で、杉並区にある高齢者施設「上井草園」でアーティストのワークショップと施設全体を美術館にするイベントを実施したことが、本プロジェクトの始まりであった。ARDAは、「アートデリバリー」の実施前に、ディスカッションを重ねてプログラムを練り上げ、高齢者とのワークショップをより豊かなものにするために、実施する高齢者施設の介護士に対してアーティストが指導するワークショップを必ず体験してもらっている、とのことである<sup>27</sup>。

### ■一般社団法人アーツアライブ「アートによる高齢者の予防医療化」

経済産業省はヘルスケア産業振興の一環として、「サービス産業強化事業費補助金(地域ヘルスケア構築推進事業補助金)」を補助しているが、2013年度において、一般社団法人アーツアライブを代表とするプロジェクト「アートによる高齢者の予防医療、及びアート活用(産業、社会、教育活性化)の基盤づくり」が採択されている。同

事業は、認知症の前段階と考えられているMCIかつ鬱である高齢者を対象として、医療や介護の現場において創作および鑑賞型アートプログラムを実施し、その臨床的効果を検証するとともに、プログラムの現場における実施および普及のためのマーケティング調査を実施するという内容である<sup>28</sup>。

### ■ウィズユーグループ<sup>29</sup>

秋田県に立地する医療法人のウィズユーグループ(医療法人惇慧会、株式会社フォーエバー)は、高齢者のQOL(Quality of Life)の向上を目的として、グループの高齢者施設において現代美術作品の展示を行うほか、施設利用者および地域住民を対象としたエデュケーション・プログラムも開催している。

さらに2006年春には、秋田県内で初めての現代美術を紹介する機関「フォーエバー現代美術館(Forever Museum of Contemporary Art)」を開設した。

### ■北名古屋市歴史民俗資料館「思い出ふれあい事業」(2000年～)

この事例は厳密にはアート分野ではないが、ミュージアムの事例として、この項に関連して記載しておくこととする。

北名古屋市歴史民俗資料館は別名「昭和日常博物館」とも呼ばれている博物館で、昭和時代の生活用具や玩具等を豊富に収蔵している。この豊富な収蔵品を活用し、北名古屋市では、回想法<sup>30</sup>を日本で初めて地域の中に取り入れた「思い出ふれあい事業」(回想法事業)を2000年から実施している。この事業は、高齢者の介護予防や認知症予防を目的とする保健福祉政策の視点と、博物館の収蔵品を他の分野にも有効利用していこうとする文化政策の視点が両輪となって進められている<sup>31</sup>。

同博物館では、「昭和日常博物館ワークショップ小論」(北名古屋市歴史民俗資料館2015)等の小冊子をシリーズとして編集・発行しているが、同書の第3章は「アート回想ワークショップ」となっており、回想法のワークショップとアート・プログラムの融合が模索されていることが伺われる。

さらに、2002年11月には、市内に立地する国登録有形文化財「旧加藤家住宅」内に、回想法の研究、研修の場、そして全国へ回想法を発信していく拠点として「回想法センター」がオープンした<sup>32</sup>。

なお、北名古屋市歴史民俗資料館の取り組みが進展する傍らで、2003年に告示された「公立博物館の設置及び運営上の望ましい基準（平成15年6月6日文部科学省告示第113号）」において、「博物館は、その実施する事業への青少年、高齢者、障害者、乳幼児の保護者、外国人等の参加を促進するよう努めるものとする」<sup>33</sup>という規定が追加された<sup>34</sup>。

### ③演劇分野

演劇またはダンスの分野においても、高齢者に関わる取り組みはさまざまな団体によって実施されている。特に「シニア演劇」という取り組みが全国的に実践されている点が特徴的である。

#### ■「八老劇団（大阪府八尾市）」（1973年～）

八老劇団は、八尾市在住の60歳以上の高齢者で結成されたアマチュア劇団である。その旗揚げは1973年で、もともとは老人の生きがいと痴呆予防が目的で設立され、今では現存する最古のシニア劇団となっている。2015年時点での劇団員の平均年齢は、73.7歳で最高齢は92歳となっている。なお、劇団の名称は、八尾市の「八」と老人の「老」をとって八老劇団と名づけられた。2008年には、それまでの功績が認められて、「サントリー地域文化賞」を受賞した<sup>35</sup>。

#### ■ふらの演劇工房「演劇リハビリテーション事業」（1997年～）

全国で認証第一号のNPO法人として著名な「ふらの演劇工房」（北海道富良野市）では、お年寄りや体の不自由な子どもを対象としたワークショップを開催し、「演劇リハビリテーション」と呼ばれる手法を用いて、表現力等を増進、心と体の回復を図っている<sup>36</sup>。

#### ■西和賀町におけるシニア（高齢者）演劇事業<sup>37</sup>（1999年～）

岩手県西和賀町では、演劇専用ホールである銀河ホー

図8 北名古屋市歴史民俗資料館（昭和日常博物館）



出所：筆者撮影（2016年5月）

ルと町社会福祉協議会が連携して、高齢者の社会参加と生きがいづくりを目的に60歳以上の高齢者を対象にした演劇講座を1999年より開催している。受講者は、公募等により町内と北上市、横手市から集まってきた高齢者で、週3回、延べ30回程度の稽古を重ね、全員がキャストとして配役され、脚本家により書き下ろされたオリジナルの劇作品の上演をもって成果発表としている。なお、本事業自体は継続して取り組まれているが、各年度の受講生で結成する劇団は単年度限りのもので、翌年度はあらためて受講生を募り、また新たな劇団を作り、新たな作品上演に取り組むというスタイルで実施されている。

2007年度には、同様の取り組みを行っていた盛岡市と青森県おいらせ町のシニア劇団が一堂に会し、銀河ホールで「みちのく高齢者演劇サミット」が開催される等、大きな盛り上がりを見せた。また2009年度には、こうした特長的な取り組みが評価され、地域における創造的で文化的な表現活動のための環境づくりに特に功績のあった公立文化施設を顕彰する「JAFRAアワード（総務大臣賞）」（財団法人地域創造）を受賞している。

#### ■田んぼdeミュージカル（2003年～）

「田んぼdeミュージカル委員会」は、北海道むかわ町において、映画制作を行うために立ち上がった高齢者とその活動を支援するスタッフにより構成される。俳優、

スタッフのほとんどが高齢者による自主映画の制作活動は、各方面から評価され、地域の自信、自慢となり、地域の活性化につながる取り組みとなっている。この活動は、「発想がユニーク。田んぼで元気になる高齢者の活躍は他の模範になる」および「ユニークな活動である。こうした活動を通じて一体感と元気がでるであろう」と高く評価され、2008年度の「地域づくり総務大臣表彰」の団体表彰を受けた<sup>38</sup>。

#### ■さいたまゴールドシアター (2006年～)

「さいたまゴールド・シアター」は、彩の国さいたま芸術劇場芸術監督の蜷川幸雄が立ち上げた、55歳以上の団員による演劇集団である。なお、2016年1月現在の団員は65歳から90歳までの39名となっている。同シアターは、2005年11月に、蜷川が、芸術監督就任後に第一に取り組むべき事業として「年齢を重ねた人々が、その個人史をベースに、身体表現という方法によって新しい自分に出会う場を提供する」ための集団作りを提案したことを契機に始まっている<sup>39</sup>。

最初の団員募集で、当初20人の募集枠に1,200人を超す応募が殺到して大きな話題となるという経過の後、2006年4月にゴールドシアターは正式に発足した。そして、週5日のレッスンでは、演出・ダンス・日本舞踊・基本的な発声等をはじめ、時代考証等の座学から殺陣(たて)といった特別演習が実施されている。そして、2013年はフランス・パリ公演で海外初進出を果たし、2014年は3カ国5都市ツアーも成功させた<sup>40</sup>。

この演劇集団の活動について、蜷川は「老人(民衆史)という対極から相対化して見ると、僕が演出してつくっている舞台なんて大したことないなあ。だから彼らとは素人の余興としての演劇をやっているのではなく、リアルの体系が違う老人たち——忘れるとか、身体が動かないとか、台詞が滑らかに言えないとか——と演劇をつくると、僕らがつくってきた演劇的リアルと違うリアルというものが出てくるんじゃないか。それが自分のやってきた仕事を撃つんじゃないか、とって真剣にやっている。(中略)やっているのは、いわゆる芸術的完

成ではなくて、『老い』というものを見せるということも含めて、全部演劇なんだということです<sup>41</sup>と語っている<sup>42</sup>。

なお、2016年12月7日には、大群集劇「1万人のゴールドシアター」がさいたまスーパーアリーナで開催される予定となっている。この「1万人のゴールドシアター」の応募条件は60歳以上(2016年12月31日時点の年齢)となっているが、特筆すべきこととして、参加費10,000円のうち、半額程度はプロジェクト自体に使用されるものの、残りの半額については若者の文化活動の支援のために投資されることである。

#### ■『カフェ・ロッテンマイヤー』(2010年)<sup>43</sup>

国際的な舞台芸術祭・フェスティバル/トーキョーでは、現代美術作家・やなぎみわのプロデュースによる『カフェ・ロッテンマイヤー』が2010年のフェスティバル期間中の毎週末と祝日に営業された。「ロッテンマイヤー」という名称は、『アルプスの少女ハイジ』に登場するクララの家の厳しい家政婦長の名前であり、『カフェ・ロッテンマイヤー』では彼女をイメージしたおばあちゃんメイドが、給仕と料理パフォーマンスでお客様をおもてなしをするという趣向のプログラムである。また、最終週には、やなぎみわ演出、おばあちゃんメイド出演の老メイド演劇『カフェ・ロッテンマイヤー』の公演が行われた。なお、やなぎみわは2009年のヴェネツィア・ビエンナーレ日本館代表作家であり、主な作品として、若い女性が自らの半世紀後の姿を演じる写真作品「マイ・グランドマザーズ」、実際の年配の女性が祖母の思い出を語るビデオ作品「グランドドーターズ」、少女と老女の物語をテーマにした写真と映像のシリーズ「フェアリーテール」等、「老女」をテーマとした作品が多い。

#### ■シニア演劇ネットワーク (2012年～)

前述したさいたまゴールドシアターだけではなく、全国で高齢者の演劇活動は展開されている。

2011年秋、東京の池袋において「全国シニア演劇大会2011」が開催され、16のシニア劇団が参加・発表した。そして、こうしたシニア演劇という活動を継続して

いくために、全国のシニア劇団の連絡先となり、活動を広く世間に知らせていくことを目的としてNPO法人シニア演劇ネットワークが2012年に組成された。現在、同NPOの会員劇団は14劇団となっている。

もちろん、この「シニア演劇ネットワーク」に加盟していないシニア劇団も多数存在している。たとえば、北海道札幌圏を拠点とする中高年アマチュア芸能サークル「生きがい探偵団」は、中高年の福祉的文化活動グループの名称である。もともとは2000年に、中高年の健康生きがいづくりを支援する「健康生きがいづくりアドバイザー北海道協議会」が北海道演劇財団と連携して、自主研修として実施した演劇ワークショップがきっかけとして結成された。2012年当時の調査で、平均年齢は70歳前後で現在の登録加入者は30名以上と報告されている<sup>44</sup>。

また、「座・たくあん」<sup>45</sup>は、2002年4月に北海道浦河町で高齢者演劇・音楽劇「心の記録～よみがえれ幻のレコード～」公演後に発足したシニア劇団である。この劇団名は、「大根役者が年齢を重ねるほどに味がでる（大根→たくあん）」ことからこの名称になったとのことである。2006年には、北海道新聞社の「第5回北のみらい奨励賞」を受賞している。2009年時点で劇団員は10名（男3名・女7名）、平均年齢79歳とのことであるが、同年以降、ホームページが更新されていないようであり、現在の活動状況が気になるところである。

その他、「発起塾」（正式名称：特定非営利活動法人発起塾）は、演劇未経験で50歳以上の人たちが俳優となり、ミュージカルを上演する集団であり、1999年10月に設立された。メンバーは、演技、音楽、ダンスをプロの講師から年間を通して習い、1年の成果として劇場でミュージカル公演を実施する。そして、そのミュージカルの上演を通して、参加者のクオリティー・オブ・ライフの実現を果たそうとする集団である<sup>46</sup>。

奇しくも今年2016年6月号で終刊を迎えた芸能専門誌『上方芸能』では、2011年3月号で「シニア演劇の時代へー表現する市民の広がり」という特集を組んでいる。その中で、シニア劇団の実態に関して、1グループあ

図9 シニア劇団かんじゅく座10周年公演  
「カラスの声も、しわがれる…」のカーテンコール



出所：筆者撮影（2016年5月）

たりの規模はおおむね10～20名、団員の年齢は40～100歳と幅広く、男女比は女性が8割、ほとんどが演劇の未経験者である、と報告されている（朝日2011：13）。さらに、この特集では、演劇以外に、演芸、舞踊、コーラス、童謡、ロック等、さまざまな分野での活動を生きがいとする高齢者の事例が報告されている。

#### ■可児市文化創造センター（アール）「カラダをほぐす、ココロを動かす」（2013年～）

可児市文化創造センターは、衛紀生氏が館長兼劇場総監督を務めているが、同劇場では「カラダをほぐす、ココロを動かす」という、高齢者の社会的孤立を防止するためのプログラムを実施している。同事業は、孤独死、孤立死という不幸な事態を招かないために、一朝何かあったときにはすぐに連絡のできる、すぐに助けを求められる、仲間づくりと体力維持のための高齢者プログラムで、毎週木曜日にアール内で実施されている<sup>47</sup>。

#### ■総おどり体操（2015年～）

新潟市は、高齢者を含めさまざまな年代がいきいきと参加している踊りのイベント「にいがた総おどり」が毎年9月に実施されている。こうした背景のもと、介護予防や健康づくりの分野に踊りを活かし、高齢者の方々に楽しく身体を動かしていただくという趣旨で、踊りのような健康体操「総おどり体操」を新潟市が2015年に制作した。

振付は、振付師のパパイヤ鈴木氏が手掛けており、血

図10 総おどり体操



出所：筆者撮影（2016年9月）

流を良くすることを意識した振付で、特に下肢の強化につながる体操となっている。また、従来の健康体操と比較して少しテンポが早く、簡単すぎず難しすぎないことから、継続的に取り組む魅力を感じられる体操となっている<sup>48</sup>。

#### ■「Re：北九州の記憶」<sup>49</sup>

北九州芸術劇場において、2012年度から継続されているプログラム。北九州市に住む高齢者の方々に地元若手作家がインタビューを行い、北九州の昔の様子や思い出、時代背景を聞き取り、それらこの街で暮らしてきた「人の記憶」に着想を得て、新たに「街の記憶」として書き起こした戯曲を作成し、上演するというプログラム。

#### ■老いと演劇ワークショップ

俳優で介護福祉士でもある菅原直樹氏が、「老い」「ボケ」「死」に向き合う演劇ユニット「OiBokkeShi」とともに実施しているワークショップ。この「老いと演劇のワークショップ」では、認知症の人とよりよい関係を築くために参加者（介護者等）に「ボケを受け入れる演技」を実際に体験してもらう。同ワークショップでは、認知症の人のおかしな言動を受け入れる演技をすることによって、認知症の人と今ここにいることをともに楽しむ介護をしてもらうことを目的にしている<sup>50</sup>。

#### ■前衛演劇に描かれる「老人」たち

本稿で整理したさまざまな事例から、演劇という表現

分野と高齢者はとても関連性が強いということが理解できる。そして、演劇のうち特に前衛演劇というジャンルにおいては、老人（高齢者）という存在にスポットライトが当てられているのである。

20世紀フランスを代表する劇作家ウジェーヌ・イヨネスコの代表作『授業』（1951年）は、老教授の家に女学生が個人授業を受けるためにやってくるところから幕を明けるのであるが、この個人授業はだんだんとエスカレートしていき、やがて不条理な結末へと展開していくこととなる。この『授業』という作品はたいへん人気の高い作品で、パリのセーヌ左岸にある小劇場・ユシエ座では1957年以来、現在に至るまで継続的に上演され続けている。また、日本においても、今はなき渋谷の小劇場ジャン・ジャンにて、1972年より11年間にわたって毎週金曜日の夜に俳優の中村伸郎がこの『授業』をロングランで上演しており、今日では「伝説の舞台」と呼ばれている。

また、不条理演劇の代表作とも呼ばれる『ゴドーを待ちながら』（1953年初演）は、ノーベル文学賞を受賞した、アイルランド出身の劇作家サミュエル・ベケットによる代表的な戯曲である。この戯曲は、ウラディミールとエストラゴンという2人の浮浪者が、木が一本しかない舞台上でゴドーという人物をひたすら待ち続けている、というものである。そして、この2人の浮浪者はベケットの草稿において、「『一人目の老人』『一人目の老人に似た二人目の老人』と名付けられていたとのことである（西村2012：32）。実際、この2人の浮浪者を老人の姿で上演する舞台も多い。東日本大震災直後の2011年4月に新国立劇場において、森新太郎の演出で上演された『ゴドー』もその系譜に挙げることができよう。

日本の演劇シーンに目を転じてみると、アングラ演劇の旗手と呼ばれた「紅テント（状況劇場）」の主宰者であり、劇作家・作家・演出家・俳優でもある唐十郎が、早稲田小劇場（鈴木忠志）のために書き下ろした『少女仮面』（1969年）は、往年の宝塚のスターにして老女優の春日野八千代を中心に、唐十郎ならではの演技論および

少女論が展開されるという作品である。なお、唐十郎は本作で第15回岸田国土戯曲賞を受賞している。

上述した鈴木忠志は、劇団「SCOT」(Suzuki Company of Togaの略称。1984年に「早稲田小劇場」から改称)の主宰であり、日本を代表する演出家である。そして、鈴木構成・演出によるギリシア悲劇『トロイアの女』(1974年初演)は、主演女優の白石加代子が、トロイアの落城と子供たちの死を嘆く老いたトロイアの王妃ヘカベと、第二次世界大戦の敗戦後の故郷も家族もすべて失った狂女とを重ね合わせて演じるという、知的なたくらみのある名舞台であった。

昨年2015年が生誕100年の節目の年であったポーランドの演出家タデウシュ・カントールの代表作『死の教室』(1975年)では、老人たちが廃墟のような教室に集まって、最初は自らの幼年期の記憶を語り始めるのであるが、やがて意味不明な単語を発しつつ、脈絡のない行動をとるようになるという前衛劇である。老人たちは、黒いベスト、上着、そして黒い帽子に髭という、いかにもユダヤ的な風貌をしており、また、なぜか自らの子供の頃の分身である人形を持っている。そしてなんとといっても最大の特徴は、演出家であるカントール自身が舞台上に登場し、彼らを指揮しはじめることであろう。この『死の教室』は日本を含む世界の演劇人たちに大きな影響を与えており、上述した「さいたまゴールドシアター」に関して、蜷川幸雄も「カントールとは違う形で何ができるか」<sup>51</sup>と語っている。

劇団転形劇場の主宰で、劇作家、演出家であった太田省吾の代表作として、第22回岸田国土戯曲賞を受賞した『小町風伝』(1977年初演)が挙げられる。この作品の主役は安アパートにひとりきりで暮らす老婆であるが、この老婆は舞台の上では一言も言葉を発しない。後に「沈黙劇」と呼ばれる、沈黙とゆるやかな動きによる新たな演劇表現が試行された最初の作品である。この作品は、能の「卒塔婆小町」にインスパイアされており、老婆がかつて愛した軍人との思い出にまつわる心象風景と貧しい独居の現実が交錯する、静謐で美しい作品となっている。

そして、日本を代表する劇作家・清水邦夫の傑作で、読売文学賞(第35回・1983年)戯曲賞を受賞した『エレジー 父の夢は舞う』(1983年初演)では、工業高校で生物の教師として勤めた後、定年退職した老人が主人公となっている。そして、死んだ息子への屈折した思いを抱き続ける老人と、死んだ息子の嫁との微妙な愛情を軸として物語が展開していくのである。また、清水邦夫のもうひとつの代表作である『タンゴ・冬の終わりに』(1984年初演)は、早発性の認知症の男性を主人公とした物語ととらえることもできる。

以上見てきた通り、主に1970年代以降の前衛劇の隆盛の中で、その代表的な作品群において、老人たちが極めて象徴的に登場してきたことが確認できる。この点についてはいずれ機会を覓て、より踏み込んだ考察してみたい。

なお、1982年8月に富山県利賀村(現・南砺市)で開催された「第1回利賀国際演劇祭」においては、上述した『トロイアの女』『死の教室』『小町風伝』が一堂に会して上演された。その他、寺山修司やロバート・ウィルソンの代表作も上演されており、今から考えると奇跡のようなラインナップの演劇祭であったことがあらためて確認できる。

#### ④音楽分野

##### ■シルバーコーラスフェスティバル(1986年～)

シルバーコーラス(高齢者による合唱)の音楽祭である「シルバーコーラスフェスティバル」が東京都合唱連盟の主催により、1986年以降、毎年秋に都内で開催されている。同フェスティバルの参加資格は「平均年齢が60歳以上の6名以上の合唱団」であり、都内だけでなく、全国から先着44団体の参加が可能である<sup>52</sup>。

##### ■奈良市「音楽療法士とシルバーコーラス」(1995年～)

奈良市では、1995年から「奈良市音楽療法士養成コース」(期間:約1年8ヵ月)を実施しており、同コース修了者を市認定「音楽療法士」として、1997年から市社会福祉協議会において採用している。また、同年に奈良

市社会福祉協議会のなかに音楽療法推進室を設置している。それに先立って1994年に開館した、地域に伝わるわらべうたをテーマとした文化施設「奈良市音声館（おんじょうかん）」で実施していた事業「わらべうた教室」が好評となり、その後音楽療法の一環として「シルバーコーラス」が採り入れられた。このシルバーコーラスは、音声館の2つの老人福祉センターを含む約1,500名（2005年当時）の市内在住の高齢者が参加している。そして、高齢者にとって、歌を歌うことで声を出しストレスを発散するだけでなく、出かける場所を増やすことは社会参加を促し、健康と生きがいづくりのみならず、一人ひとりが地域の活動の担い手として大きな役割を果たしている、と報告されている<sup>53</sup>。

#### ■わいわい音頭（1999年～）

作曲家・野村誠が、1999年から10年以上続けて、神奈川県老人ホーム「さくら苑」を40回以上訪れ、老人たちと共同作曲を続けた長期プロジェクト。非営利法人アーツフォーラム・ジャパンの企画による。2010年に、横浜市のBankARTにて、「老人ホーム・REMIX#1」を初演し、長期プロジェクトがようやく形となった<sup>54</sup>。なお、「作曲」とは言っても、一般的な作曲とはかなり異なっている。参加する老人たちはもちろん作曲に関する高度な知識や経験があるわけではなく、「障害などでおぼつかない手つきで『演奏』する楽器の調子外れの音や、会話とも独り言ともつかない言葉の断片など」が「わいわい音頭」の中に編集されていくのである<sup>55</sup>。熊倉敬聡はこうした「作曲」に対して、「老人たちの『記憶』を形作る個人的な、あるいは超個人的な歴史の断片が、『野村誠』というメディア（媒体＝霊媒）を通して、現在と出会う。その出会いの痕跡がここでの『作曲』にほかならない<sup>56</sup>と、積極的に評価している。そして、このようなタイプの芸術を動機づけるものは、「生の喜び、〈幸福〉にほかならないのではないだろうか<sup>57</sup>と評価している。

#### ■音無美紀子の歌声喫茶（2011年～）

女優・音無美紀子の提唱によるプロジェクトであり、東日本大震災の仮設住宅の集会所や広場等へ「歌声喫茶

を出張開店」し、大勢の人たちと声を合わせて歌うことで、ひと時でも楽しさや元気を取り戻し、住民たちとのコミュニケーションを深める役に立つことを目的とした活動である。ソングリストにある、懐かしの歌謡曲、童謡・唱歌、世界の歌の曲目の中から、来場者が歌いたい曲を、エピソードとともにリクエストカードに記入し、それを抽選ボックス形式でアコーディオンやピアノの演奏とともに会場全員で歌うというものである<sup>58</sup>。

#### ■ローリング・ストーンズからパンクへ

本稿執筆の最中（2016年4月）に、英国のロックバンド「ローリング・ストーンズ」が本年内に、2005年以来11年ぶりとなる新作アルバムの発売を計画しているとの報道があった<sup>59</sup>。

ローリング・ストーンズの現在のメンバーは、ボーカルのミック・ジャガー（1943年生まれ、72歳）、ギターのキース・リチャーズ（同じく72歳）、ギターのロン・ウッド（1947年生まれ、68歳）、ドラムスのチャーリー・ワッツ（1941年生まれ、74歳）であり、平均年齢72歳の「老人音楽隊」である。

そして、後述するスコットランドにおける高齢者のアート・フェスティバルであるLUMINATEの中にも、音楽による回想法のプログラムがあるが、これらのプログラムで使用される音楽の中にも、ローリング・ストーンズが登場している。実際、現在70歳の高齢者は若い時分に同世代の音楽としてローリング・ストーンズやビートルズ等のロック草創期のバンドを聴いていたのである。その意味では、今日のローリング・ストーンズは、「老人による、老人のための音楽」と言うこともできよう。

一方、ローリング・ストーンズが回想法のプログラムで使用されるようになってきたということは、いずれストーンズ以降の世代の音楽についても、今後の回想法で使用される可能性があるということの意味する。たとえば、ロンドン・パンクを代表するバンド、セックス・ピストルズのライブ・デビューは1975年であるから、1960年生まれの世代は15歳当時にパンクの洗礼を受けたことになる。そして、2020年には、1960年生ま

れが還暦を迎える年なのである。つまり、2020年以降での音楽の回想法においては、パンクが使用され、高齢者たちが「ああ、懐かしい」などと言ってパンクの調べに身を委ねる、という事態も想定されるのである。

## ⑤小説分野

### ■老人文学

松原ほか(1979)によると、1960年代に入って以降、当時の文壇の長老たちが続々とそれぞれの代表的な作品を発表してあらためて存在感を示すようになった。たとえば、谷崎潤一郎(1886年生まれ)が『鍵』(1956年、当時70歳)、『瘋癲老人日記』(1962年、同76歳)を、また川端康成(1899年生まれ)は『眠れる美女』(1961年、同62歳)等を、そして室生犀星(1889年生まれ)は、『われはうたへどもやぶれかぶれ』(1962年、同73歳)を発表した。そして、これらの作品においては、初老の人物または老人が作者の分身とも読める主人公として設定されており、老人の心情や生態がリアルに描かれている。

松原ほか(1979)においては、「老年のために“死”の意識にさらされるとき、改めて“生”を確認せざるをえないという形で、個人の生々しい声が文学化」された、と分析している。さらに、同書では、評論家・平野謙による「老人文学」の定義を引用しているが、それは「単に老人を書いた作品でもなければ、老人が書いた作品でもない。老人が老人を書いた作品のことである」と定義されている(松原ほか1979:312)。

1960年代以降も、老人文学の系譜は続いていく。芥川賞作家・中上健次(1946年～1992年)は、故郷・紀州熊野を舞台にして、ひとつの血族と「路地」のなかの共同体を中心にした「紀州サーガ」とよばれる独特の土着的な作品世界を作り上げたが、その中で、短編集『千年の愉楽』(1982年)および長編小説『奇蹟』(1989年)において、狂言まわしとなる年老いた産婆オリウノオバが大きな役割を担っている。

また、筒井康隆(1934年～)が、職を辞し10年が経過した75歳の元・大学教授を主人公にして、その意識が崩壊していく様を描いた小説『敵』(1998年)を64

歳で上梓した。また同氏は、増大した高齢人口調節のため、政府が70歳以上の国民に殺し合いさせる「老人相互処刑制度(シルバー・バトル)」を開始したという設定の小説『銀齡の果て』(2006年)を72歳で上梓している。

そして21世紀に入ってからは、作家のデビュー自体も高齢化する時代となっている。たとえば、作家・水村美苗の母親でもある水村節子(1922年～2008年)は、2000年に78歳で初の自伝的小説『高台にある家』を上梓した。

また、加藤廣(1930年生まれ)は、2005年に小説『信長の棺』で75歳という高齢での作家デビューが話題となった。同書は、当時の小泉純一郎総理が同書を愛読書として挙げたことからベストセラーにもなった<sup>60</sup>。

さらに、2013年1月に発表された第148回芥川龍之介賞には黒田夏子(1937年生まれ)の『abさんご』が受賞作に選ばれた。同氏は当時75歳9ヵ月であり、1973年に受賞した森敦の61歳11ヵ月を大幅に更新する「史上最年長」の受賞となった。また、記録に残っている限りでは、候補者としても最高齢だとされる<sup>61</sup>。

また近年においては、極めて高齢の作家が新作を上梓するという事例も多く見られるようになってきている。たとえば、小島信夫(1915年生まれ)は、83歳となる1998年に『うるわしき日々』で第49回読売文学賞している。また、91歳となる2006年に『残光』を発表した際には大きな話題となった(なお、小島信夫は同年没)。

そして、小説家の佐藤愛子(1923年生まれ)は、91歳となる2014年に作家人生最後の作品と位置付けた長編小説『晩鐘』を刊行し、翌2015年に同作品で紫式部文学賞を受賞している。

さらに、瀬戸内寂聴(1922年生まれ)は、89歳となる2011年に『風景』で泉鏡花文学賞受賞しており、その後も92歳で『死に支度』、続けて93歳となる2015年に『わかれ』を上梓している。

### ■介護文学

「老人文学」とは関連するものの別のカテゴリーで「介護文学」と呼ばれる一群の作品が存在する。

この「介護」というテーマをいち早く扱った文学作品が、1972年に発行された有吉佐和子の長編小説『恍惚の人』である。同書は認知症となった舅の介護に忙殺される嫁の姿を描いた小説で、1972年の年間売上1位のベストセラーとなり、書名の「恍惚の人」は当時の流行語となった。こうした関心度の高さから、高齢者の介護が大きな社会的問題としてスポットが当てられることになった。また、翌1973年には映画化されほか、たびたびテレビドラマ化や舞台化もされている<sup>62</sup>。

その後1995年に、佐江衆一が老親介護の体験を描いた『黄落』がベストセラーとなり、第5回ドゥマゴ文学賞を受賞している。ちなみに、本作の10年前となる1985年に佐江衆一は、痴呆症の老妻に自殺された老夫を描いた『老熟家族』という、やはり高齢者をテーマとした小説を発表しており、同作を原作とする映画「人間の約束」(吉田喜重監督)は、サンセバスチャン国際映画祭の銀の貝殻賞および国際批評家賞受賞、芸術選奨文部大臣賞を受賞している<sup>63</sup>。

そして21世紀に入ってからは、2004年にモブ・ノリオは、祖母の死をきっかけにして書いた、そのものずばりの題名の小説『介護入門』で第98回文学界新人賞を受賞するとともに、同作品で第131回芥川龍之介賞を受賞した。

「介護小説」は芥川賞と相性が良いようで、2015年には、「早う死にたか」と毎日のようにぼやく祖父とともに暮らす孫を主人公とする、羽田圭介による新しい家族小説『スクラップ・アンド・ビルド』が第153回芥川賞を受賞している。

また、前述した水村節子の娘である水村美苗は、母・節子をモデルとして、母親の介護に追われ、離婚を考える五十代の女性を描いた最近作『母の遺産－新聞小説』を2012年に刊行しており、同書で大佛次郎賞を受賞した<sup>64</sup>。

その他、『高円寺純情商店街』(1989年)で直木賞を受賞した小説家ねじめ正一は、米寿で認知症の母親を介護する日々を描いた小説『認知の母にキッスされ』を

2014年に発表している。

同じ2014年、認知症にかかり、介護が必要となった父親の存在と東日本大震災とを描いた小説『還れぬ家』により、佐伯一麦は第55回毎日芸術賞を受賞している。

小説だけではなく、マンガにおいても老人は主要なキャラクターとして描かれている。高野文子の『田辺のつる』(1982年)は、平凡な家庭に暮らす老女つるを幼女の姿で描くと言うマンガならではの手法により、認知症となった高齢者の姿をリアルに描きあげた。

翌1983年には、萩尾望都や竹宮恵子らとともに「花の24年組」と呼ばれる作家・大島弓子が『金髪の草原』を発表する。同作は、認知症(記憶障害)のため自分のことを20歳のままだと思い込んでいる独居老人と、そのお宅にヘルパーとして赴任した若い女性の60歳ほどの年齢差の疑似的恋愛の物語である。同作において、主役のひとりである独居老人は、若者の姿で描かれている。もっとも、このような手法は大島弓子が高野文子の前年の作品をパクったというわけではない。もともと大島弓子は、名作『綿の国星』(1978年～)において、主役である猫たちを擬人化して描いており、『金髪の草原』はその自らの手法を応用したものであると考えられる。そして、高齢者の一風変わった恋愛というテーマは、大島弓子の頭の中で熟成していき、性同一性障害×高齢者という形で、傑作『つるばらつるばら』(1988年)へと結実することになる。

また、『ペコロスの母に会いに行く』(2012年)は、漫画家の岡野雄一による、認知症の母親の自らの介護体験を題材とする漫画である。母親の認知症の症状が進む中で、死んだ夫(作者の父親)と話をするようになる姿等が抒情的に描かれている。なお、同作は2013年に、第42回日本漫画家協会賞優秀賞を受賞している。

以上のように、「介護」は現代小説(およびマンガ)において繰り返し描かれるテーマとして定着している。そして、上述した「老人文学」が自らの分身としての老人を描いていたのに対して、これらの「介護文学」と呼ばれる作品群は、介護される対象である(主に)高齢者の配偶者、

子や孫の視点から、老人およびその介護の様子がより客観的に描かれる作品が多い点が特徴である。

#### ■紡ぎ屋 (2010年～)

「紡ぎ屋」は「文学」そのものではないが、お年寄りの話を聴き書きして、その人が生きた「証」を文字として残し、一冊の本にまとめるという、文学的でクリエイティブなスモール・ビジネスである。具体的には、話したい内容を3回に分けて聞き、40ページ程度の本(納品は同じ冊子を3冊)にまとめる、というものである。この「紡ぎ屋」は、福岡市と北九州市の中間に立地する福津市の、旧津屋崎町の津屋崎漁港一帯の集落「津屋崎千軒(つやざきせんげん)」に移住した都郷なびによって営まれている<sup>65</sup>。

#### ⑥俳句分野

##### ■老人文学としての俳句

俳句は、五・七・五の韻律から成る日本語の定型詩で、世界最短の定型詩とされる<sup>66</sup>。この俳句について、俳聖として知られる松尾芭蕉(1644年～1694年)は「老後の御楽に可被成(なさるべく)候」(俳諧を老後の楽しみとせよ、の意味)と自らの遺状(1694年)で記している(松尾+萩原1976:318)。また、詩人・萩原朔太郎は「老年者の文学」と述べた(そして、そのことに対して、室生犀星は「俳句は老人文学ではない」という小文を執筆しているのであるが)<sup>67</sup>。

なお、日本における日刊の新聞紙の発行部数は2014年で4,536万部、成人人口千人あたりの部数は410部/千人となっている<sup>68</sup>。この1人あたりの部数は世界で最高であるが、特筆すべきことは、これらのほとんどの新聞紙において「俳句」の欄が設けられていることである。こうしたデータから理解できる通り、日本において俳句という文化的な営みは、特別な存在として定着しているのである。

日本における現在の俳句人口は、600万人とも700万人ともいわれている<sup>69</sup>。また、2005年時点には全国の俳句結社の数は800～1,000団体と推定されており、生成消滅を繰り返しながらも増加傾向にあるとされている<sup>70</sup>。

そして、高齢者に対して「『自作の短歌や俳句を新聞(雑誌)に掲載しないか』という電話があり、無料と思いきや承諾したところ、高額な掲載料を請求された、など『短歌』『俳句』の新聞あるいは雑誌等への掲載の電話勧誘に関する相談が、2008年度以降、急増している」と独立行政法人国民生活センターが2010年に報道発表している。これらの高齢者の平均年齢は78.4歳である一方、過去5年間で60歳未満は11件(2.0%)とわずかであり、高齢者に限定されている特徴がみられる、とのことである<sup>71</sup>。こうしたことから、上述した600～700万人の俳句人口の大半は高齢者であると推測される。

実際に高齢となってからも句作を続ける俳人はきわめて多い。たとえば、月刊の俳句総合誌『俳句』では2010年9月号で「九十代の俳句人生」を特集しており、現代俳句協会名誉会長、日本芸術院会員、文化功労者である俳人の金子兜太(1919年生まれ)を含む計16名の「九十代の俳人」たちの新作5句と代表作10句を掲載した。

##### ■衰退のエネルギー

俳人・永田耕衣(1900年～1997年)は、55歳で定年を迎えるまでは会社員としても一応の出世をしたが、その後90歳を超えて最晩年に至るまで旺盛な創作活動を行った。90歳の時に上梓した句集『泥ん』(1990年)で、前年中に刊行された最も優れた作品集に贈られる「詩歌文学館賞」を1991年に受賞している。その人生は、城山三郎の『部長の大晩年』(1998年)という小説のモデルともなった。また、永田耕衣はイエイツの名詩「長い沈黙のあと」の「肉体の老朽は叡智である」(安藤一郎訳)という詩句に出会ったことから、「老いのおもしろさ」についての思索を深めていった。そして、「老朽、若年に劣るまじく候」「人生衰退亦大いに可なり」(永田1996:5)として、このような人生の晩年における衰退の力を「衰退のエネルギー」と名付けた。

#### ⑦映画分野

##### ■老人映画

正式な分類ではないが、「老人映画」と称される一群の映画がある。これらは老人が主人公または印象的な脇役

を務めている映画のことである。以下に、内外の代表的な「老人映画」を紹介したい。

『ハリーとトント』(原題：HARRY AND TONTO)は1974年公開のアメリカ映画で、老人(ハリー)と猫(トント)のコンビによるニューヨークからシカゴへの道中を描いたロード・ムービー。ハリーを演じたアート・カーニーは、本作でアカデミー主演男優賞に輝いた。テレビ朝日の「日曜洋画劇場」で放送された時には、『ハリーとトント ～翔んでるおじいちゃんのアメリカ横断』との副題であった。

『八月の鯨』(原題：The Whales of August)は1987年公開のアメリカ映画で、メイン州の小さな島で暮らす老姉妹のひと夏の日々を淡々と描いた作品である。撮影当時、姉妹役を演じたリリアン・ギッシュは93歳、ベティ・デビスは79歳であった<sup>72</sup>。この映画は、スコットランドにおける高齢者のアート・フェスティバルであるLUMINATEでも「老人映画」として上映されていた。

『黄昏』(原題：On Golden Pond)は1981年製作のアメリカ映画で、湖畔の別荘を舞台に、人生の黄昏を迎えた老夫婦とその娘、彼女の結婚相手の連れ子との心の交流を描いている。この映画は、1981年度の第54回アカデミー賞で主演男優賞、主演女優賞、脚色賞の3部門で受賞した。そして、主演男優賞を獲得したヘンリー・フォンダは授賞式(健康問題で欠席)の数ヵ月後の1982年8月に子供たちに見守られながら心臓病で死去した。つまり、彼にとっては本作品が文字通り、俳優生活の「黄昏」であり、最後の映画出演となったのである<sup>73</sup>。

日本においても数多くの老人映画が製作されている。特に著名な作品としては、小津安二郎監督による、『晩春』(1949年)、『麦秋』(1951年)、『東京物語』(1953年)の三部作が挙げられる。これらの3作品において、原節子が演じたヒロインはすべて「紀子」という名前であり、まとめて「紀子三部作」と呼ばれている。このうち、『晩春』では、笠智衆が初老の父親が娘を嫁にやる悲哀を演じている。また、『麦秋』では、老夫婦が娘の結婚を契機とし

て地方に隠居するというストーリーである。そして『東京物語』は、年老いた夫婦が成長した子供たちに会うために上京する、一種のロード・ムービーとなっている。これら三部作に共通して、人間の老いと近づきつつある死、夫婦の絆、親子の情愛が描かれている。

また、『午後の遺言状』は1995年公開の日本映画。第38回ブルーリボン賞および第19回日本アカデミー賞最優秀作品賞受賞作品。撮影当時80歳を超えていた新藤兼人が監督。主人公である老齢の女優蓉子役は日本を代表する名女優の杉村春子が演じているが、本作が最後の映画主演作となった。また、主人公のかつての女優仲間、現在は重度の認知症となっている役を、1950年に引退していた朝霧鏡子が45年ぶりに復帰して出演した。なお、公私にわたり新藤兼人監督のパートナーであった乙羽信子は本作の公開前に死去し、本作が遺作となった。製作側も映画の内容もすべて高齢者向けの映画である。

### 3 | 米国におけるCreative Agingの事例

次に、米国におけるCreative Agingのための文化政策の状況を概観してみたい。

米国では、米国の一般大衆にとって重要な問題またはトピックを官邸(ホワイトハウス)で議論するため、米大統領の主催、大統領行政府(EOP: Executive Office of the President)の後援による全国的な会議として「ホワイトハウス会議(White House Conference)」<sup>74</sup>が開催されている。そして、実はこのホワイトハウス会議の中で最もよく知られたテーマが「高齢化を議題とするホワイトハウス会議」(White House Conference on Aging)であり、アイゼンハワー大統領時代の1961年に開催されて以降、1971年、1981年、1995年、2005年、2015年とほぼ10年ごとに開催されている。このように「高齢化」が重要視されているのは、米国でも日本と同様に少子高齢化が急速に進んでいるからであると推測される。

そして、直近に開催された2015年のホワイトハウ

す会議に政策提言していくことを目的として、同年に NEA (National Endowment for the Arts : 全米芸術基金) と NCCA (the National Center for Creative Aging : 全米創造的高齢化センター) の共催により、The Summit on Creativity and Aging in America が開催されている。

以上の事実からも理解できる通り、米国において高齢化および Creative Aging は極めて重要な政策課題となっているのである。

### ① NEA 「芸術と高齢化 (Arts & Aging) 」

上述した会議 The Summit on Creativity and Aging in America の主催者でもある NEA では、さまざまな芸術分野の振興と同じ位置付けで、「アートへのアクセスのしやすさ (Accessibility) 」を主要な活動領域と認識し、実践している。そして、「アートへのアクセスのしやすさ」の3つの主導的な取り組み (Leadership Initiatives) のうちのひとつが、「芸術と高齢化 (Arts & Aging) 」となっているのである<sup>75</sup>。そして NEA では、米国大統領リンカーンの有名な言葉 (government of the people, by the people, for the people)<sup>76</sup> を本歌取りしたような、「高齢者のための、高齢者自身による、高齢者とともにある (for, by and with older persons) 」水準の高い芸術体験の必要性和価値を踏まえて、プロフェッショナルのアーティストおよび医師の感受性を向上させる活動を実践している<sup>77</sup>。

また NEA は、高齢化と芸術に焦点を当てた全米規模での最初の研究成果を 2006 年に公表している。この研究はジョージワシントン大学との協定のもと、全米の 65 歳から 103 歳 (平均約 80 歳) の高齢者 300 人を対象として実施された。同研究においては、高齢者を「①毎週、アート・プログラムに参加させたグループ」「②通常の活動だけを行っているグループ」に分けて 1 年後および 2 年後にフォローアップした結果、以下のように、アート・プログラムに参加することによるポジティブな効果が確認された<sup>78</sup>。

a) より良い健康状態：医師の往診回数が少なく、投薬

が少ない。

b) 精神の健康管理の評価尺度におけるよりポジティブな評価

c) 活動全般におけるより積極的な関与

### ② NCCA (the National Center for Creative Aging ; 全米創造的高齢化センター)

上述した The Summit on Creativity and Aging in America を NEA と共催している団体が NCCA である。この NCCA は、創造的な芸術表現と高齢者の生活の質 (quality of life : QOL) との間の活力に満ちた関係について理解を醸成することを目的として 2001 年に設立された非営利機関である。NCCA が主導し、さまざまな機関と連携して創造的な高齢生活に関するプログラムを実施しているほか、Creativity and Aging の分野において、The Gene D. Cohen Award という顕彰も実施している。

また、NCCA は NEA やその他の助成財団からの支援を受けて、高齢者に提供されるアート・プログラムに関する、全米で最初となる要覧 (Directory of Creative Aging Programs in America) も作成している。この要覧には、本稿執筆時点 (2016 年 3 月 16 日現在) で合計 125 件のプロジェクトが掲載されている。そしてこの要覧は、プログラム名称、組織名称、プログラムの成熟度<sup>79</sup>、実施されている州、芸術分野、障害等への対応状況 (Adaptive Design)、実施場所といった項目で検索することができるようになっている<sup>80</sup>。

### ③ ESTA (Elders Share the Arts ; 高齢者に芸術を)<sup>81</sup>

ESTA という団体は 1979 年に設立され、ニューヨーク市ブルックリンを拠点に地域密着型のアート活動を展開するアート NPO である。高齢者を対象としたアート NPO としては全米でも最大級の団体であり、現在までに延べ 3 万人以上の高齢者等にプログラムを提供してきた実績がある。上述した要覧にも 3 件のプログラムが掲載されている。また、上述した NEA による Creative Aging に関する研究には全米で 4 つの施設 (現場) が参加したが、ESTA はそのうちのひとつに選定されている。

なお、ESTAのWebサイトには、同団体の責務が表明されているが、そのひとつとして「ESTAは高齢者がアーティストであると認識し、創造的な個人として高齢者に対して敬意を払います」と記述されている点は特徴的である。

ESTAの実施するコアプログラムとしては、「Legacy Arts：レガシーとして継承されるアート」「History Alive!：生きている歴史」「Arts & Memory：アートと記憶」の3つのプログラムがある。

このうち「Legacy Arts」は、高齢者の個人的な思い出をオーラル・ヒストリー（oral history：口述される個人史）として語ってもらい、それを、プロフェッショナルなアーティストのサポートによってアート作品として創造するというプログラムである。

また、「History Alive!」は、高齢者から若い世代に歴史の物語を伝え、それを承継するとともに、高齢者と若者が一緒になってアート作品を制作するという市民社会参画（Civic Engagement）の手法を活用したプログラムである。このプログラムに参加する高齢者と若者は週1回、8～12週にわたり面談することになる。このプログラムは教育機関、青少年施設、高齢者施設のパートナーシップにより実施されている。なお、この「History Alive!」は、ニューヨーク州の「共通基礎スタンダード（Common Core State Standards）」<sup>82</sup>にも認定されているほか、1999年の国際高齢者年に米国順守委員会（the United States Committee for the Observance）によって表彰もされており、社会的にも認知と評価が高いプログラムである。

そして、「Arts & Memory」は、認知症の高齢者とその介護者がペアを組むグループプロセス（集団によるカウンセリング）によって、高齢者が連想した物語や感覚的な物語を記述したり、アート作品にしたり、その他の形式で記録するというプログラムである。

## 4 | 英国における Creative Aging の先進事例研究

### ① 概論

日本は世界に先駆けて超高齢社会に突入し、現時点の高齢化率は世界に類を見ない水準に到達している。ただし、高齢化は先進諸国に共通した政策課題であり、諸外国においても先進的な取り組みが実践されている。

英国では前述した「認知症サミット」の開催に象徴されるように、認知症対策が国家の重要な政策と位置付けられている。

2005年には「意思決定能力法（Mental Capacity Act）」が英国国会で制定され、2007年から施行されている。同法により、認知症等の「ケアや医療の現場では、認知症の人の自己決定権を尊重する本法に基づいて、判断能力や自己決定能力の評価のプロセスが透明化、厳密化され、大きな影響と変化が生じている」とのことである（公益財団法人東京都医学総合研究所2013：187）。

また、2009年には「認知症国家戦略：Living well with dementia:A National Dementia Strategy」が制定されている。この戦略では12項目の目標が掲げられているが、その中で「目標11：介護施設における認知症ケアの改善」における具体的取り組みのひとつとして、「介護施設における芸術療法、音楽療法、演劇療法等の治療活動の供給は、良質な社会的環境と施設入居者の個性が尊重されるような自己表現の可能性を実現するために、有益な役割を持つことができる」と勧告されている（Department of Health2009：58）。

こうした背景のもと、近年において、高齢者を対象とした多様なアート活動がさまざまな文化芸術団体により実践されている。これらの英国において高齢者を対象にした先駆的な取り組みを行っている美術館や劇場、NPO、助成機関等の先進事例に関しては、ブリティッシュ・カウンシルの主催により、2015年4月13日から17日まで日本に14の文化芸術団体の関係者が招へいされており、その際の資料が大変に参考となるので、以下にその概要を整理する。

図11 英国の文化芸術団体による活動事例（資料協力：ブリティッシュ・カウンシル）

1	<p><b>団体名：ルミネイト</b> (以下②に詳述)</p>
2	<p><b>団体名：イコール・アーツ</b></p> <p>イコール・アーツは、高齢者にアートをより身近に感じてもらい、芸術活動に積極的に参加してもらうことを目指す非営利団体。さまざまな参加型のアート・プロジェクトを通して高齢者の孤立を防ぐ活動をしている。</p> <p>また、「クリエイティブ・エイジング」を促進するための研究を支援するとともに、パートナー機関と連携し、クリエイティブ・エイジング、芸術、認知症といったテーマに対する関心と理解を深めるための取り組みも行っている。介護施設が、創造的なプログラムを取り入れられるよう、介護スタッフを対象にさまざまなトレーニング・プログラムも実施している。</p>
3	<p><b>団体名：ウェスト・ヨークシャー・プレイハウス</b></p> <p>英国最大規模を誇る劇場であるウェスト・ヨークシャー・プレイハウス (WYP) は、過去25年にわたって300以上のパワフルで、活力溢れる演劇作品を制作、発表している。これまでに400万人を超える観客が作品を観劇し、何千もの人々が、創造性を刺激するワークショップやコミュニティ活動、教育プログラムに参加している。コミュニティと教育の専門家14名からなる芸術開発チームは、あらゆる年齢層、経歴、能力の人々が芸術に触れる機会を創出しており、劇場は学びの場としても発展を続けている。そして高齢者との活動は、この分野をリードするものとして評価され、週に1回行われるプログラム『ヘイデイズ』は、劇場による定期的な高齢者参加プロジェクトとしては、英国最大規模を誇る。クリエイティブな参加型プログラムや認知症フレンドリーな公演などの認知症の人々との活動は、劇場にとって欠かせないものとなっている。</p>
4	<p><b>団体名：ナショナル・ミュージアムズ・リバプール</b> (以下④に詳述)</p>
5	<p><b>団体名：マンチェスター大学ウィットワース美術館／マンチェスター博物館</b></p> <p>マンチェスター博物館は、人類の歴史や自然史に関するコレクションを有し、年間40万人以上の来館者を迎える博物館である。工費1,500万ポンド(約26億6,000万円)の改装を経て近年再オープンしたウィットワース美術館は、公園内に位置し、国際的にも重要なアートコレクションを持ち、独自性の高い展覧会を実施すると同時に教育の機会を提供している。マンチェスター博物館およびウィットワース美術館が展開するラーニング・プログラムは高く評価されており、これまでに「クロア・アワード」はじめ数々の賞を受賞している。現在博物館は宝くじ基金から50万ポンド(約8,870万円)の資金提供を受け、社会的に孤立した人々を対象に、市全域でのボランティア・プログラムを主導。またウィットワース美術館は“参加”と“ウェルビーイング”をテーマに、公園を舞台に、アート、自然、そして人々をつなぐ方法を模索する新しいプログラム「カルチュラル・パーク・キーパー」を立ち上げた。</p>
6	<p><b>団体名：マンチェスター・カメラータ</b></p> <p>1972年に創立されたマンチェスター・カメラータは、トップクラスの音楽家によるダイナミックなパフォーマンス、優れたアーティストとのコラボレーション、そして音楽によって人間性、社会性を育む先駆的なラーニング・アンド・パーティシペーション・プログラムで知られる英国有数の室内管弦楽団である。その常に革新的なアプローチは、音楽、オーケストラの可能性を拡張してきた。</p> <p>その先駆的なラーニング・アンド・パーティシペーション・プログラムでは、「Young People in School (学校にいる若者)」、「Health and Wellbeing (健康と福祉)」、「Youth Programme (若者プログラム)」の3つのテーマを掲げ、コンサートをはじめ、次世代とのコラボレーションや認知症の人の生活の質の向上等、さまざまな方法で人々との結び付きを深める活動を展開している。</p>
7	<p><b>団体名：エンテレキー・アーツ</b></p> <p>エンテレキー・アーツは、ロンドン南東の地域社会に深く根付いた参加型アートプロジェクトを展開する団体である。過去25年間、幅広い年齢のさまざまな人々との活動を通して、人生に変化を起こすような独自の手法を培ってきた。「聴くこと」や「共感すること」に重きを置き、そこから芸術的な表現を導き出すエンテレキーの手法は、地域社会で孤立しかねない人々をつなぎ、創造的なエネルギーを解き放つものとして、英国内で高く評価されている。社会から取り残された個人やグループが、市民としてのつながりを再考するうえで、芸術は中心的役割を果たすという信念のもと、①長期的な病気や複雑な障害を抱える若者、②重度の複合的な障害を抱える成人、③学習障害また高齢化にともなう障害のある高齢者(85歳から100歳まで)に向けた活動を行っている。グループの家族、友人、近隣住民といった支援者とともに、パブリックスペースや教会、学校、介護施設、文化施設、サッカー場等でプロジェクトを行っている。</p>
8	<p><b>団体名：サドラーズ・ウェルズ</b></p> <p>世界有数のコンテンポラリー・ダンス劇場として知られるサドラーズ・ウェルズは、ロンドンにある3つの劇場で年間を通じて、タンゴからヒップホップ、バレエ、フラメンコ、ボリウッド、最先端のコンテンポラリー・ダンスまで、あらゆるダンス・プログラムを上演し、世界最高レベルのダンスを観客に提供している。</p> <p>同劇場のCompany of Eldersは、63～92歳のメンバーで構成されるダンス・カンパニーである。有名振付家によるダンス作品を、地域ベースの小劇場から国際的な劇場まで、大小さまざまな舞台で公演している。同カンパニーはテレビのドキュメンタリー番組でも何度も紹介され、世界各国をツアー公演し、ヴェネツィア・ビエンナーレ等のフェスティバルにも参加した。また、彼らに触発され、全英に数多くのダンス・カンパニーが設立されている。ダンスに参加したい、創造的な活動がしたい、身体能力を高めたいと望む高齢者に向けた一般参加型のクラスを、2つの拠点で毎週開催している。</p>

<p><b>9 団体名：ウィグモア・ホール</b></p> <p>ウィグモア・ホールは、ロンドンのウェストエンドに位置し、室内楽、器楽、古楽、声楽を専門とする世界有数のコンサートホールである。間もなく誕生115年を迎える同ホールでは、年間450以上のコンサートが開催されており、世界の人気を誇るソリストや室内楽演奏家が、ルネサンスからコンテンポラリージャズ、そして新しい委嘱作品に及ぶさまざまなレパートリーを演奏している。</p> <p>また、高い評価を得ている教育プログラムは、革新的な創造プロジェクト、コンサート、イベント、オンラインリソースを通じて、幅広く多様な聴衆に提供されている。ウィグモア・ホール、および学校、保育園、病院、コミュニティセンター、介護施設で、年間450以上行われるイベントとワークショップを通じ、人々と音楽の新たなつながりを生み出している。</p>
<p><b>10 団体名：アーツ・フォー・ヘルス・コーンウォール・アンド・アイル・オブ・シリー</b></p> <p>2001年の設立以来、英国有数の芸術・保健機関として、創造力を通じた健康と福祉の向上に尽力している。多岐にわたる創造的プロジェクトを企画し、訓練を受けた創造活動の実践者やボランティアと協力して、コーンウォールとシリー諸島の人々に芸術を届ける。特に、高齢者および認知症の人々の健康と福祉を、芸術を通して向上させることに重点を置く。</p> <p>2010年3月には「グラクソ・スミスクライン／キングズ・ファンド・インパクト・アワード」を受賞。選考委員は「小規模な組織ながら、多数の利用者を擁し、活動成果は高水準。リーダーシップを有するダイナミックな機関であり、特に要介護高齢者、認知症患者、ホームレスの人々との活動は革新的である」とその活動を高く評価した。</p> <p>2009年には、介護・入所施設、デイケア施設、病院等、高齢者介護が行われている場所に芸術を結びつけた活動が評価され「ガーディアン公共サービス・アワード」を受賞。以来、病院、介護用住宅から個人宅に至るまで、数多くの刺激的なプロジェクトを通じて、高齢者との活動を進化・発展させ続けている。2015年度で活動終了。</p>
<p><b>11 団体名：キール大学</b></p> <p>1949年にノース・スタッフォードシャー・ユニバーシティ・カレッジとして設立された。創設者は斬新な教育方針を掲げ、複数の分野にまたがる学際的学問の発展を目指した。スタッフォードシャー北部に位置する同校は敷地617エーカーに及ぶ英国最大規模の総合キャンパスを誇っている。</p> <p>1987年にキール大学に併設された老年社会学センターは、設立時から、高齢化と人の晩年についての社会的および批評的分析に焦点をあてた幅広いプロジェクトを実施してきた。</p>
<p><b>12 団体名：ベアリング財団</b></p> <p>1969年に設立された民間の助成団体であるベアリング財団は、差別や社会的弱者に関わる課題にアプローチし、成熟した市民社会を形成することを目的に活動している。</p> <p>現在、年間200～300万ポンドの資金提供を行うほか、他の団体と共同で助成プログラムも実施している。これまでに約50の団体やプロジェクトに助成を行ってきた。助成プログラム『Late Style (レイト・スタイル)』では、70歳以上のアーティストに作品を委嘱した。</p> <p>英国の4つのアーツ・カウンシル（イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランド）と共同で、英国全土の文化芸術団体やアーティストによる高齢者を対象にした取り組みを支援している。また、ウィンストン・チャーチル・メモリアル・トラストと連携し、高齢者を対象にした文化芸術活動について、英国の文化関係者による海外事例調査を支援している。</p>
<p><b>13 団体名：カルースト・グルベンキアン財団</b></p> <p>カルースト・グルベンキアン財団は、文化、教育、社会、科学等の助成を目的として1956年にポルトガルで創設された。本部をリスボンに置き、ロンドンとパリに支部がある。英国支部は、国や地域、学問分野、産業分野等の領域を越えて知識や経験を共有し、社会的、文化的、環境的価値をもたらす関係を築くことにより、とりわけ弱い立場にある人々を長期にわたって支え、状況を改善することを目的としている。</p> <p>同財団によるSharing the Stageは、高齢者福祉の改善を目的とした、参加型パフォーマンスアーツの新しいモデルを探求するR&amp;D（研究開発）プロジェクト。</p>
<p><b>14 団体名：アーツ・カウンシル・イングランド</b></p> <p>「あらゆる人に素晴らしい文化芸術を (Great Arts and Culture for Everyone)」をミッションに掲げ、人々の生活を豊かとする文化芸術活動を推進、支援する。支援先は文化機関、ミュージアム、図書館等、多岐に渡り、その活動は演劇から、デジタルアート、読書、ダンス、音楽、文学、工芸、コレクションまでさまざまである。</p> <p>2015年度にアーツ・カウンシル・イングランドとベアリング財団は共同で助成プログラム「介護施設の高齢者のための芸術活動」を運営した。</p>

出所：ブリティッシュ・カウンシル「高齢社会における文化芸術の可能性」(2015)<sup>83</sup>

## ② Luminareについて

### ■背景

スコットランドの高齢者（＝老齢年金支給開始年齢；pensionable age、男性 65歳以上、女性 60歳以上）は、2014年時点でスコットランドの人口（約534.8万

人）の20%を占めている<sup>84</sup>。

この高齢化率は日本よりも低い水準ではあるものの、日本と同様にスコットランドにおいて高齢化が重要な政策課題である点には変わりはない。このような高齢化の状況を背景として、スコットランドにおいてはアーツカ

ウンシル「クリエイティブ・スコットランド」によって、高齢者を対象としたさまざまなアート・プロジェクトが実施されている。

たとえば、“Living Voice”はケアホームに入居している高齢者が、作詞や物語を創作できるようにワークショップ等を実施するプログラムである。このプログラムは、クリエイティブ・スコットランドのRFO (Regularly Funded Organisations；3年間の継続的な助成を受ける団体)の団体Scottish Poetry Libraryが実施している<sup>85</sup>。

また、“Forget Me Not” (私を忘れないで)は、認知症の高齢者とその家族と一緒に演劇作品を観劇できる環境づくりのプロジェクトである。こちらは、やはりクリエイティブ・スコットランドのRFOの団体フェスティバル・シアターが2015年から3年間かけて製作する予定である。同プログラムについては、高齢者支援を目的とする公益団体Life Changes Trustが支援している<sup>86</sup>。

そして、高齢者を対象としたプログラムの中でも、最大のプログラムが創造的な高齢者のためのフェスティバル『Luminate』であり、スコットランド全域で2012年から毎年10月に開催されている。

#### ■Luminateの概要

Luminateは、あらゆる人が年齢を重ねることの意味を探究する機会を提供することを目的として、高齢者の創造性をテーマとした一連の文化プログラムであり、それらをフェスティバルという形式で発現させることを企図したものである。

このLuminateは、アイルランドで1996年から実施されている高齢者のアート・フェスティバルBealtaine festival (後述)にインスパイアされたもので、スコットランドのアーツカウンシルであるCreative ScotlandとBaring Foundation (ベアリングス銀行が設立した公益財団)が共同で、その開催を決定した。

そして、フェスティバルの実施に先立って、事業のディレクターを公募し、Anne Gallacher氏が採用された。なお、同氏はエジンバラ生まれで、主にイングランド

でCommunity Engaged Artsに取り組んでいたというキャリアの持ち主である。このようにして2012年の10月からLuminateが開始された。

なお、Luminateでは「高齢者」に関する厳密な定義は設定していないが、おおむね55歳以上を高齢者と位置付けている。ちなみに、スコットランドの登録慈善団体Age Scotlandは、「50歳以上」を高齢者と位置付けている<sup>87</sup>。

#### ■組織体制

Luminateはフェスティバルの名称であり、事務局であるNPOの名称でもある。

NPOの専任スタッフは、通年では1名 (Anne Gallacher氏)のみである。そして、6～11月の半年間はもう1名をフルタイムで雇用し、さらにフェスティバル開催月 (10月)は、パートタイムを追加で雇用しているほか、多数のボランティアも参加している。

#### ■事業費

Luminate2015の事業費は約20万£で、プログラム経費補助と事務局の人員費を含んでいる。主な資金提供者は3者で、クリエイティブ・スコットランド、Baring Foundation、Age Scotland (高齢者に対する英国最大の慈善団体AgeUKのひとつの組織)である。なお、Luminateはクリエイティブ・スコットランドにおける2015年4月から2018年3月までのRFO (Regularly Funded Organisations；非公募の継続的な助成を受ける団体)であり、クリエイティブ・スコットランドから3年間合計で30万£が助成される予定である。

一方、Luminateがリグラントするプログラムに関しては、地理的な配慮がなされている。具体的には、大都市以外の小さなコミュニティにおけるプログラムを優先して補助している。各プログラムの1/3をLuminateが補助 (各プログラムとも、残りの2/3は別の財源から調達)している。

#### ■効果・影響

Luminateフェスティバルに参加している各団体にとっては、単に助成金が提供されるだけではなく、パン

フレット等にプログラムの概要が掲載され、スコットランド中で認知されるという効果がある。

そして、スコットランド中で認知されることによって、「今後もプログラムを継続していこう」というポジティブな姿勢が多くの団体から聞かれるようになった、とのことである。

### ■プログラムの事例

2015年には通算4回目のLuminateが開催され、劇場、ギャラリー、公民館、ケアホームおよび高齢者ランチクラブ等、スコットランドの至る所で合計424件の創造的なイベントが1ヵ月にわたり実施された。

実施される分野は、ダンス、ドラマ、音楽、ビジュアル・アート、ストーリーテリング、写真、手仕事等、さまざまであり、合計で4万人以上の高齢者が参加した。また、高齢者の参加だけでなく、若年層との世代間交流も企図された。

事業には、「主催(curated)」と「委託(commissioned)」の2種類がある。そして、2013年において、約半数の事業は、認知症向けであった。また、約4割の事業が、参加型であった。その他、約7割の事業が、参加費無料であった。

#### ◇Luminate Challenge

2015年のLuminateでは、Webを通じた公募による参加型のプログラムも実施された。

それはLuminate Challengeという名称で、スコットランドの住民であれば誰でも参加することができる写真投稿のプログラムである。ただし、撮影・投稿する人は、自分と異なる世代の人物の肖像写真を撮影することが条件となっている。たとえば、高齢者が幼児の写真を撮り、若者が高齢者を被写体とする等、さまざまな人物写真が投稿された。また、プロフェッショナルの写真家のRobin Gillandersが招聘され、ガイドラインとなる作品を制作した。そして、作品はWebで公開されるだけでなく、Luminate Challengeから選抜された作品群が、Luminate 2015の一環としてスコットランドを巡回した<sup>88</sup>。

図12 Turner Prize 2015 Luminate Week



出所：筆者撮影（2015年10月）

#### ◇Turner Prize 2015 Luminate Week

ヨーロッパで最も権威のある現代美術のアワードTurner Prizeが初めてスコットランドで開催されることに連動して、高齢者を対象としたワークショップがLuminateの一環で実施された。開催場所は、グラスゴウのTramway(トラムウェイ)という名称の路面電車の車庫を改装した広大な複合文化施設である。高齢者たちは実際にTurner Prizeの候補作品を鑑賞し、それらにインスパイアされた創作を行った。

なお、筆者が取材した際に、このワークショップに参加していた高齢の女性のひとりが語っていたセリフが印象的である。その女性曰く、「このLuminateはとっても素敵なアート・プログラムだと思うけど、ひとつだけ不満な点があるの。それは“高齢者”のためのフェスティバルという点よ。だって、私たちは“高齢者”なんかじゃあ、ないのだから」。

#### ◇Bryn Evans' Hip Hop-eration

世界一高齢のニュージーランドのヒップホップ・グループBryn Evans' Hip Hop-eration(最高齢のメンバーは96歳!)によるラスベガスでの公演のドキュメンタリー映画がLuminateの一環で上映された(Luminate 2015: 28 & 79)。

#### ◇TRADING WISDOM

アーティストのRosie Gibson(64歳)がキュレー

ションした展覧会。地域の老人ホーム等から10人の高齢者を選び、それらの作品を一般市民が見ることができるようカフェやコンピューター・ショップ、薬局等の地域の5カ所の店舗で展示された(Luminate 2015 : 41)。

#### ◇THE QUEEREST CABARET IN TOWN

DIVEという名の若いゲイ・アーティスト・デュオにより、高齢者のLGBT(L=レズビアン、G=ゲイ、B=バイセクシュアル、T=トランスジェンダー)を対象としたキャバレー・ダンスのショーが開催された(Luminate 2015 : 31)。

#### ◇LIFTING THE LID : A HISTORY OF SCOTLAND

認知症の高齢者のための読み聞かせのプログラム。高齢になると認知症となる確率も高くなることを背景としている。

なお、英国では「リラックス・パフォーマンス(relaxed performance)」という、学習障害を持つ子ども向けの劇場体験の試みが実施されている。この「リラックス・パフォーマンス」では、たとえば子どもたちが大人数の中にと怖がってしまう懸念があるため、小さなグループに分かれて体験するようにする等、さまざまな配慮がなされている。そこで、この「リラックス・パフォーマンス」の手法を参考にして、認知症の高齢者を対象とした読み聞かせのプログラムを開始した。読み聞かせは、認知症患者の記憶を呼び起こす効果のあるクリエイティブな手法であるとされる(Luminate 2015 : 31)。

#### ◇LIVE MUSIC NOW TOUR : ROBYN STAPLETON AND CLAIRE HASTINGS

スコットランドのトラッドやフォークのライブを、認知症患者の比率が高いケアホームで実施。認知症のケアに対して、音楽の持つ力は大きいと考えられている(Luminate 2015 : 42)。

#### ◇A CALENDAR OF MEMORIES

現在の高齢者たちが若い頃に聴いたであろう1950～60年代のポピュラー音楽(ビートルズ、ローリング・ストーンズ等)をカジュアルなスタイルで45分間のミニ・

コンサートとして開催。コンサート後に、ミュージシャンたちと一緒にお茶を飲んだりしながら、音楽にまつわる思い出を語り合う(Luminate 2015 : 33)。

#### ◇CRAFT CAFÉ OPEN DAY

CRAFT CAFÉ OPEN DAYは、子供たちから高齢者まで幅広く対象としているスコットランドのアートNPO(社会的企業)であるImpact Artsとの共同プロジェクトである。老人ホームには入居していないが、ひとりで生活するにはやや心許ない高齢者を主な対象として、高齢者の生活支援の一環として実施している。

会場となったElderpark Community Centreが立地しているGovanという街は、グラスゴー市の郊外であり、もともとは造船、ミシン、織物、製糖等の工場が集積していた、活力のある労働者の街であった。しかし、現在は、これらの工場はほとんど閉鎖されてしまっており、街には失業者があふれている状況である。

こうした背景のもと、CRAFT CAFÉは、LHA(Local Housing Authority : 地方住宅公社)とImpact Artsがパートナーシップを組んで実施しているコミュニティ・エンゲージド・アーツのプログラムで、2008年からパイロット・プログラムを開始して、2009年からここElderpark Community Centreで最初に本格実施となった。現在は、ここを含めて、スコットランド内の計8カ所で実施している。

Elderpark Community Centreは、LHAが施設を所有しており、Impact Artsに運営を委託している。当施設における常勤スタッフは2名である。

ここElderpark Community Centreでの高齢者の参加者は約30名で、年齢は80歳代から最も若くて53歳となっている。なお、当初は55歳以上を対象にプログラムを開始したが、現在は年齢に関しては柔軟に対応しているとのことである。

また、参加者の住居はほとんどGovanの公営住宅である。そして、参加者たちの大半は、心身の健康に課題を抱えている。また、参加者の大半は伴侶を亡くしており、孤独や喪失感という課題も抱えている。

これらのエリアの公営住宅の入居者は、社会的または文化的な生活から排除され、孤独な生活を過ごしている高齢の比率が高い。またこれらのエリアでは、所得、就労、健康、教育、住宅、アクセス、子どもの貧困等、多様な分野において“剥奪 (multiple deprivation)”が発生している。

CRAFT CAFÉは、こうした人たちを対象として、絵画や版画、彫刻やモザイク、編み物や裁縫等に取り組むプロジェクトである。ただし、一方的に教えるのではなく、まるでアーティスト・イン・レジデンスをしているアーティストに接するような感覚で、参加する高齢者の意向をファシリテーターが引き出している。そして、人生において、アートがポジティブな継続的变化をもたらし、高齢者の孤独を軽減させる効果を狙っている。なお、制作された作品は、アートフェア等で販売もしている。

Impact ArtsによるSocial Return on Investment Evaluation (2011年)の研究によると、クラフトカフェのパイロット事業が数多くの重要なポジティブな結果を

図13 CRAFT CAFÉ



出所：筆者撮影（2015年10月）

図14 Senior Moments



出所：筆者撮影（2015年10月）

起こしたことが示されている。たとえば、クラフトカフェに参加した高齢者には、プログラムに刺激またはインスパイアされて、自己実現の感覚をもたらされた。また、参加者は、より良かつより緊密な関係の新しい友人をつくることができ、そのため以前ほど孤独を味わうことは無くなったと報告されている (Impact Arts2011 : 2)。

また、2014年度には、220名の高齢者 (55歳以上) がクラフトカフェに参加した。そして、参加者の80%が、より自信を持つことができ、また、社会とつながっていると感じられたと報告されている。また、アート活動への参加を通じて、参加者の46%が、物質的にまたは精神的によりよい生活へと改善されたと報告されている (Impact Arts2015 : 45)。

#### ◇Senior Moments

このプロジェクトは、グラスゴー市郊外のCastlemilk地域に立地する老人介護施設の30人の高齢者たちによる展覧会である。高齢者の直近の肖像写真が、過去における肖像写真と思い出の言葉に結び付けられている。なおこの展覧会は、Castlemilk地域の老人介護施設、グラスゴー・カレドニアン大学、エイジ・スコットランドの3者による共同プロジェクトである<sup>89</sup>。

#### ③参考：ベルタン祭

上述したLuminateも参考にしたという、高齢者のアート・フェスティバルの先行事例としてBealtaine

フェスティバルが挙げられる。同フェスティバルは、加齢にともなった創造性 (creativity as we age) の祝福をテーマとする、アイルランドにおける全国的なフェスティバルである。毎年5月の1ヵ月間、アイルランド中のアートセンター、劇場、図書館、ギャラリー、コミュニティセンター、公民館、さまざまな介護環境(在宅、施設)、さまざまな文化的な場所のほか、野外でも Bealtaine イベントが展開されている<sup>90</sup>。

このフェスティバルは1996年に開始され、2015年は20回目を迎えた。参加者は12万人以上で、中高年齢層の初心者からプロフェッショナルなアーティストまで幅広い。また分野についても、音楽、ダンス、文学、映画、美術、演劇、朗読、彫刻、写真、詩に至る多彩なジャンルの活動が展開される。アーツカウンシルからの一部助成を受け、NPOのAge & Opportunityが主導している。Age & Opportunityは、毎年、Bealtaineのイベントのために、地方自治体、アートセンター、図書館、中高年齢層の団体、介護施設、地域団体、各地の協会が招待し、特に新しい試みを支援している<sup>91</sup>。

なお、2009年に、アイルランド国立大学ゴールウェイ校の社会的老齡学センターがBealtaineフェスティバルの評価に関する自主研究レポートを発行している。同レポートによると、やや古いデータであるが、2007年の予算は21万ユーロ、イベント数は1,300件、そしてイベントの主催者として参加する団体は、337団体となっている。また、全体の9割以上ないしは9割弱の参加者が、社会的つながりの構築 (Social networking)、自己啓発 (Personal development)、コミュニティとのつながりの構築 (Engagement with the community)、芸術的な自己表現の手助け (Facilitating self-expression)、生活の質の向上 (Quality of life) 等で良い影響があったと回答している (Ní Léime & O' Shea 2009: 117)。

そして、2007年からAge & Opportunityは、すでに評価の確立したアイルランドの高齢のアーティストをBealtaine大使になるように招聘をしはじめた。

Bealtaine大使は、フェスティバル参加者のグループにおいて創造性を促進するために、メンターの役割を果たしてきた。彼らは現時点で11名が認定されているが、いずれも最高の水準と評価を得ているアーティストであり、多様な創造的分野で活動している。そして、大使たちの存在は、Bealtaineフェスティバルに参加するすべての高齢者に誇らしい感覚をもたらしている、とのことである<sup>92</sup>。

#### ④記憶のための博物館 (House of Memories)

英国では、ミュージアムを中核とする高齢者 (認知症) のための特筆すべきプログラムも実践されている。それは、リバプール国立博物館群 (National Museums Liverpool) が実施している "House of Memories" というプログラムである。このプログラムは、認知症を患っている人の介護者を対象としたトレーニング・プログラムを中核とする複数のプログラムの総称である。プログラムの参加者に対して、認知症に関する情報を提供するとともに、認知症を患っている人たちが人間らしい積極的な生活 (quality of life) を経験できるようにするための実務的なスキルや知識を提供することを目的としている<sup>93</sup>。

そして、認知症を患っている人々にとっては個人の歴史と記憶が大きな価値および意義を有する、という認識のもと、"House of Memories" のひとつのプログラムとして、「記憶のスーツケース (memory suitcases)」というプログラムが行われている。この「記憶のスーツケース」には、過去の歴史と関連する当時の音楽や流行の品、絵本、ゲーム、10進法移行以前のコインおよびポンド紙幣、リバプール高架鉄道のポスター、クラシック・カー (フォードアングリアモデル) の写真等の品々が含まれている。「記憶のスーツケース」は、いわゆる「回想法」によって、それぞれの介護者が世話をしている高齢者と新たな関係を構築することが可能となる。そして、介護者たちは、この「記憶のスーツケース」を最長2週間、無料で借りることができるのである。また、ミュージアムショップのオンライン販売では、「1950年代の生活」

図15 記憶のスーツケース (イメージ)



出所：National Museums Liverpool “House of Memories”

「1960年代の生活」「女性と戦争」「銃後の生活」等、6種類の「記憶のスーツケース」が販売されてもいる。そして、この「記憶のスーツケース」を十分に活用するためにも、介護者たちがあらかじめトレーニング・プログラムに参加することが推奨されている<sup>94</sup>。

この「記憶のための博物館」の評価レポートによると、プログラムに参加した72人の認知症の介護者のほとんどから、「認知症に関する悪いイメージを低減させ、認知症介護に関する環境を改善することに役立っている」というポジティブな回答があったとのことである (National Museums Liverpool 2004 : 9)。

また、「記憶のための博物館」の事業費は、わずか132,500 £ (1 £ = 200円で換算すると2,650万円)であったが、この投資によって1,000人の介護者を対象として認知症の自覚のためのトレーニングを実施することができ、結果として1,148,290 £ (約2.3億円)の社会的な価値を創造した、と評価されている (National Museums Liverpool 2004 : 10)。

この“House of Memories”というプログラムは、さまざまな団体から顕彰もされている。たとえば、イングランドとウェールズを対象に生涯学習の促進を行うNGOのNational Institute of Adult Continuing

Education (NIACE : 全国生涯学習研究所) は、地域で活躍する生涯学習の機関やプログラムを表彰するAdult Learners Weekというイベントを実施しているが、2014年の大賞をこの“House of Memories”が受賞している。

また、国家主導の政策領域 (National Initiative category) である認知症対策の一環として、アルツハイマー学会による認知症フレンドリー賞 (Dementia Friendly Award) の2014年のHighly Commended (激賞) 賞もこのプログラムは授賞しているのである<sup>95</sup>。

## 5 | Creative Agingに関するまとめと考察

このように、日本および米国、そして英国におけるCreative Agingの取り組みを概観すると、実に多様な活動が展開されているという実態が理解できる。もっとも、取り組みが多様であるがゆえに、これらを現状分析のうえ、全体的な政策として再構成していくためには、なんらかの分類の軸が必要であろう。

そこで、以下の「図15 Creative Agingの取り組みの分類」においては、「高齢者の関与方法 (主体か客体か)」と「活動の場 (高齢者施設の内部か、外部での活動か)」という2つの軸により、Creative Agingの取り組みを4

つの象限に分類してみた。

①第1象限：従来型のアート・セラピー

左下の「高齢者が客体で、高齢者施設内部の活動」の代表的な事例としては、従来型のアート・セラピーまたは芸術療法などが挙げられる。このカテゴリーにおいては、アートは医療・介護の手段として活用され、高齢者はあくまでも医療・介護の対象でしかない。

なお、これらの分野に関しては、すでにさまざまな学術的研究の蓄積がある。また、実際にこうしたサービスを提供している社会福祉事業者も多数存在する。たとえば学会としては、「アートミーツケア学会」が積極的に活動している。同学会は、人間の生命、ケアにおけるアートの役割を研究する場として、また人間を幸福にし、人間の全体性を回復していくためのアートの力を社会にいかしていくためのネットワークとして、2006年に設立された。そして、「高齢者とアート」「障害と創造性」「アート・テクノロジー・ケア」等、アートとケアに関する調査研究等を推進している<sup>96</sup>。

②第2象限：“老い”を主題とするアート

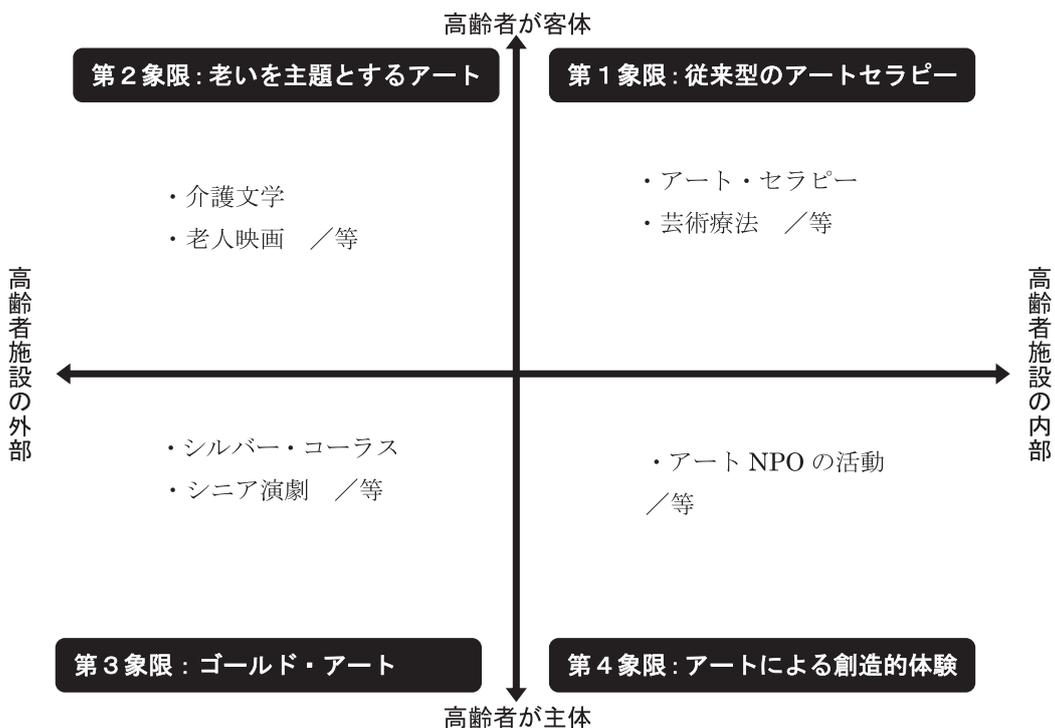
このカテゴリーは、“老い”を主題にした芸術である。具体的には、福島県立美術館で開催された展覧会「老いをめぐる美とカタチ」、アーティストやなぎみわによる「マイ・グランドマザーズ」に代表される「老女」をテーマとしたシリーズ作品、さらに「介護文学」と呼ばれる一連の小説群や「老人映画」等、人間の“老い”という現象そのものを主題として、高齢者が客体として位置づけられる芸術がこのカテゴリーに該当する。

③第3象限：ゴールド・アート

第3象限は高齢者が自ら主体的に芸術に関与するというカテゴリーであり、これを「ゴールド・アート」と名付けてみた。

たとえば、パフォーマンス・アーツの分野においては、「シニア演劇」や「シルバーコーラス」といった、高齢者が自ら演じたり、歌ったりすることを楽しんでいる活動がこのカテゴリーに該当する。その他、俳句や1960年代の「老人文学」も、高齢者による文学活動として、この

図16 Creative Agingの取り組みの分類



出所：筆者作成

「ゴールド・アート」と位置づけることができる。

#### ④第4象限：アートによる創造的体験

このカテゴリーの活動は、「高齢者施設の内部で、高齢者が主体となって行われる活動」のことであり、第1象限の「従来型のアート・セラピー」と一見すると類似しているが、高齢者がより主体的に創造活動に参加しているという特徴がある。

たとえば、アートNPOが高齢者施設にアーティスト等を派遣して、従来型のアート・セラピーよりも創造的な活動を行っている事例がこの象限に該当する。

#### ⑤第1象限から第4象限へ：アート／セラピーのパラダイム・シフト

さて、以上のように2つの視点をタテヨコの軸として、Creative Agingの活動を分類してみると、おおむねの活動はいずれかの象限に当てはめることができる。ただし、いくつかの先進的なプログラムにおいては、それぞれの象限から滲み出し、軸線のボーダーを越境していくかのような活動が特徴となっていることにも気づく。

たとえば、野村誠による「しょうぎ音楽」。芸術家が老人福祉施設を訪問して、老人たちとワークショップ的な活動を行う、という表層だけをなぞってしまうと、このプロジェクトは「従来型のアート・セラピー」と大差ないように見受けられるかもしれない。しかし、この「しょうぎ音楽」において、老人たちは単なるセラピーの客体ではなく、「作曲」という創造的行為の主体なのである。もしもこのプロジェクトに一定のセラピー的な意義があった場合、それは従来型のセラピーではなく、「セラピー」のパラダイム・シフトと呼ぶことができるのかもしれない。

同様に、この「しょうぎ音楽」は、「芸術」の在り方にも鋭い問いかけを行っている。従来、「作曲」という行為は、高度に専門的な学習を経た、一部の芸術エリートに独占されてきた。こうした特権を剥奪して、音楽に関する高度な知識がない老人たちが「作曲」を行うということは、「芸術」という制度や権威そのものへのアンチテーゼであると見ることもできる。すなわち、「しょうぎ音楽」は、セ

ラピーの分野においても、また、アートの分野においても、パラダイム・シフトを準備・提供していると評価することができるのである。

#### ⑥第4象限から第3象限へ：アール・ブリュット現象

従来は高齢者施設や介護施設の内部だけで展開されてきた活動が、アートとしての水準の高さや突出具合等から、施設を飛び出して、美術館やギャラリー等、施設の外部で紹介・展示されるケースも登場している。

高齢者が単にアート活動に主体的に参加するということだけではなく、まるでアール・ブリュットの分野において障害者等がアーティストのような存在に転じていくのと同様に、高齢者がアーティストに変貌していくという現象である。

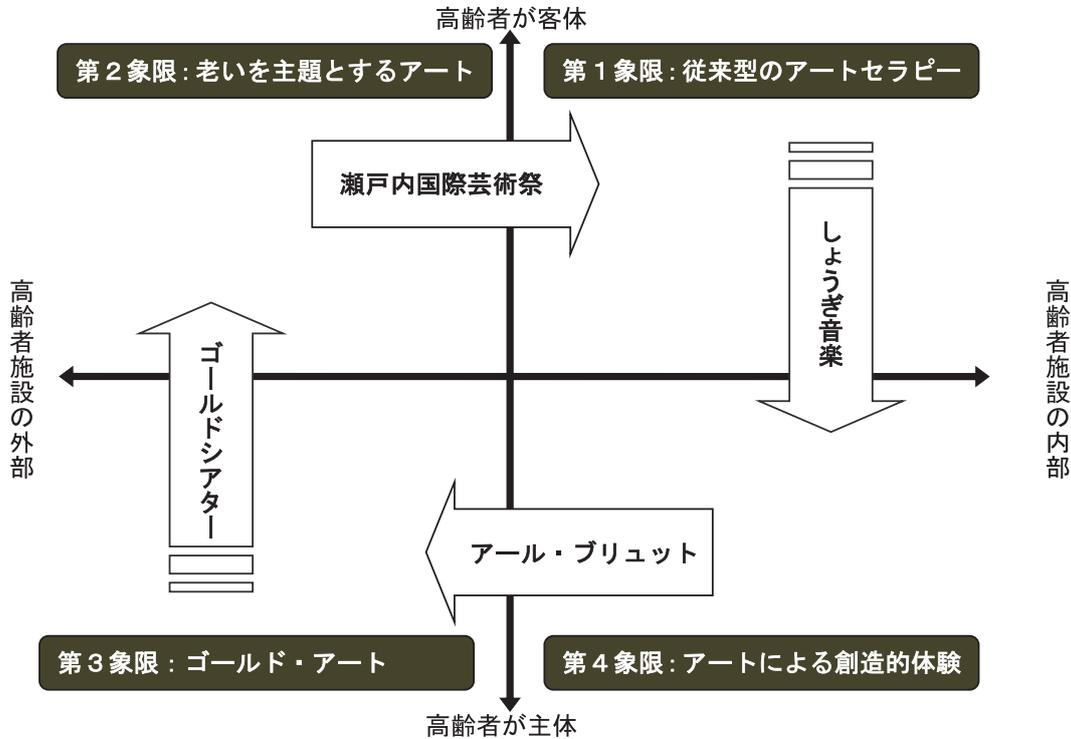
たとえば、前述した「快走老人録」「マイ・アートフル・ライフ」「シルバーアート」等の展覧会においては、もともとはアートを職業としているわけではない高齢者がアーティストとして作品を制作・出展している事例である。

#### ⑦第3象限から第2象限へ：“老い”のメタ化

第3象限においては、「シニア演劇」に代表されるように高齢者が主体的に活動する事例を紹介したが、同じ高齢者が演技をするという活動でも、「さいたまゴールドシアター」は、一般的な「シニア演劇」とは一線を画する何かを感じられる。

この「さいたまゴールドシアター」に関して筆者はとても印象深い思い出がある。かつて筆者が鑑賞した公演では、主演の高齢者がセリフを忘れてしまい舞台の進行が中断してしまったのである。その直後に蜷川幸雄が舞台に登場し、役者たちに向かって最初から再びやり直しの指示を出したあとで、観客の方に向きおなり、「みなさん、これは普通の演劇ではないですから。その点、勘違いしないようにお願いします」と語っていた。この蜷川の言葉が象徴しているように、「さいたまゴールドシアター」とは、一見、高齢者が演じる普通の演劇のような外観をしているが、実は本質的にはまったく異なる、社会的・芸術的な挑戦なのである。

図17 Creative Agingの新しい動向



出所：筆者作成

「さいたまゴールドシアター」においては、高齢者自身が演じることを通じて自らの「老い」を体感し、それを観客にさらすことで、劇場に集う多くの人が「老い」という現象を目の当たりにして、それを観客自らも受容していくことになる。そしてこの瞬間に、舞台上立つ高齢者は、自ら演じる主体であると同時に、自らの「老い」を作品として観客に提示することを通じて、「老い」を客体化もしているのである。別の言い方をすると、この「さいたまゴールドシアター」は、単なる高齢者による演劇活動という枠を超えて、「老い」そのものをテーマとした芸術表現になりつつあるように感じられるのである。

このような動きは、美術の分野において、折元立身のART MAMAシリーズにも感じ取ることができる。こうした事例を分析していくと、高齢者による芸術表現は、芸術表現そのものを変革するポテンシャルを持っているのかもしれないとも感じられる。

⑧第2象限から第1象限へ：新しいセラピーへ

また、瀬戸内国際芸術祭は、「老い」そのものがテーマ

というわけではないが、芸術祭の舞台となる島々での高齢化の進展は、芸術祭開催の目的とも密接に関連している。そして、芸術祭開催の結果として、島々で高齢者に笑顔が広がったという事実は、島をある種の高齢者施設を見立てた場合、広義のセラピーとしてとらえなおすこともできるのではないだろうか。

6 | Creative Aging に関する政策提言

前章までの分析で明らかにした通り、英国や米国と比較して、日本はCreative Agingに関する個々のプログラムはさまざまな分野で展開されているものの、政策としての体系的な取り組みは残念ながらなされていない。

一方で、高齢化が世界最速で進展する日本においては、Creative Agingの試みが大きな可能性を秘めていることも確かである。そこで、以下においては、日本におけるこれからのCreative Agingに関する8つの政策提言を試みたい。

### ①全国的なフェスティバルの開催およびプラットフォーム的な組織の設立

本稿でCreative Agingと呼んでいる高齢者による／高齢者のための芸術活動が、社会から幅広く認知されることは今後の展開のために極めて重要である。現状もCreative Agingのためのさまざまなプログラムが実践されているが、個々のプログラムが孤立している状態にある。

そこで、Creative Agingを社会に広く情報発信していくための手法として、スコットランドのLuminateやアイルランドのBealtaineのような「高齢者のアート・フェスティバル」を全国的な規模で開催することもひとつの手法であると考えられる。たとえば、厚生労働省の所管する「全国健康福祉祭(ねんりんピック)」と文化庁の所管する「国民文化祭」を今後同一の都道府県で開催してはどうだろうか。毎年開催する都道府県は変わっていくこととなるが、これが実態として「日本版Luminate」として機能を発揮し、その運動が全国に普及・拡大していくことが期待される。

また、日本においては英国のアーツカウンシルや米国のNEAのようなアートのための中間支援のプラット

フォームが存在しないため、高齢者施設等とアートNPOまたはアーティストの結びつきが、属人的な関係やある種の偶然に委ねられてしまっている。

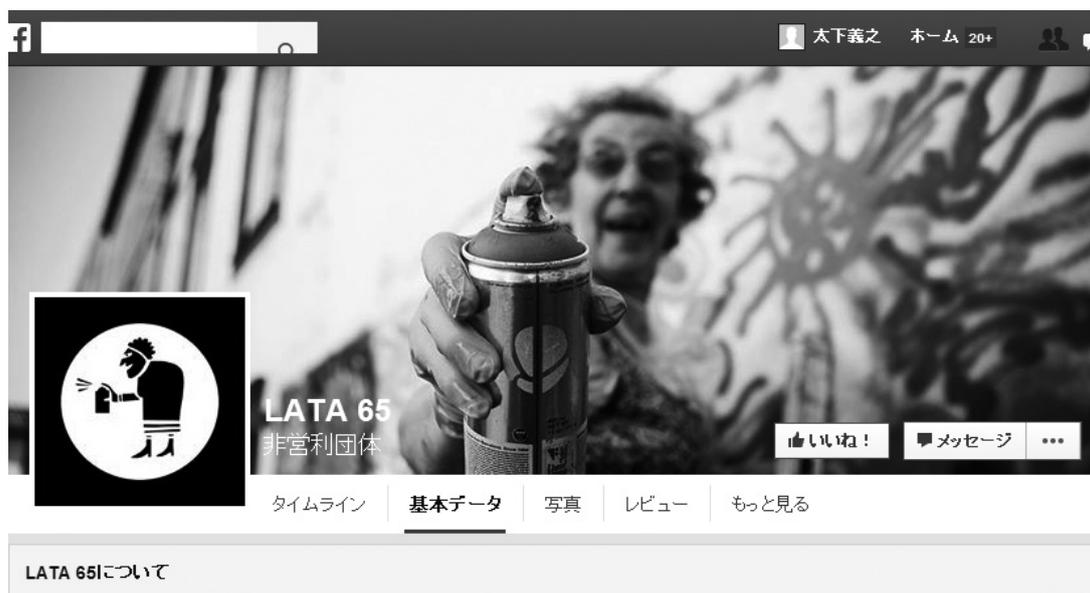
そこで、上述した「日本版Luminate」をプロデュースする事務局としても、日本においてCreative Agingのためのプラットフォーム的な組織の設立が望まれる。

### ②対象とする芸術分野の拡張

日本においてCreative Agingの活動を展開していくにあたり、「高齢者による芸術文化活動」に対する先入観を排除して、対象とする芸術分野を幅広く設定することが必要であろう。たとえば、本稿でも取り上げた「俳句」については、そもそも一般的に「高齢者の嗜み」として見られているのではないか。一方で、英国の事例として紹介した通り、もはやローリング・ストーンズが回想法のために利用される時代となっているのである。そこで、従来は若者の文化とみなされてきた分野も、Creative Agingの対象とするべきであろう。

■事例：高齢者のストリートアート「LATA65」(ポルトガル)  
昨年(2015年)にインターネット上で話題となっ

図18 高齢者のストリートアート「LATA65」(ポルトガル)



出所：LATA65 Facebook

たのが、高齢者を対象にグラフィティ（落書き）やストリートアートを教えるポルトガルの少々変わった種のワークショップ「LATA65」である。ちなみに「LATA」はポルトガル語で（スプレー等の）缶を意味する。

LATA65は、高齢者がストリートアートを体験することを目的とした初期的なプロジェクト（initiative）である。このLATA 65は、もともとはクリエイターのためのシェアオフィスCowork Lisboaによって、ポルトガルのコヴィリア（Covilha）で開催されているグラフィティのフェスティバル「Wool」都市芸術祭（Wool Covilhã Urban Art Festival）とのパートナーシップにて開発された。そしてこのプロジェクトは、Active Aging（活動的な高齢化）および世代間の連帯等の概念が当然のことであることを確認することを目指している<sup>97</sup>。

### ③全国の公民館をCreative Agingセンターに転換

地域住民にとって最も身近な学習の拠点であり、交流の場としても重要な役割を果たしている「公民館」は、文部科学省の調査によると、全国で1万4,681館となっている（2011年10月現在）<sup>98</sup>。

実は公民館における高齢者を対象とした活動の歴史は古い。1973年から、文部省が市町村に対する高齢者教室の開設補助を開始すると、公民館等に高齢者教室が開設され、これがその後、「高齢者大学」やシニア・カレッジといった形で事業展開されていった、という歴史的経緯がある（江澤2013：14）。

しかし、近年における少子・高齢化の著しい進展をはじめとして、過疎化の進行や家族形態の変化、価値観の多様化等、公民館を取り巻く環境は激変している。こうした環境の中、公民館は、その基本的な存在意義と役割を見直し、新たな取り組みの企画・検討が必要となっていると言えよう。

そこで、従来型の高齢者の余暇活動という範疇を越えて、本稿で事例を見てきたようなCreative Agingの拠

点として、全国の公民館を再活性化していくことが期待される。また、地域包括センターと公民館が連携して、地域ごとに独自のCreative Agingのプログラムを展開していくことも考えられるであろう。

実際に民間事業の分野では、下記の「Conti多摩センター」のように、新しいコミュニティセンターのような施設が登場している。

#### ■事例：Conti多摩センター

「世界初のセカンドライフ・ナビゲーター大型複合施設」を標榜して2015年9月にオープンした、セカンドライフを支援するための会員制コミュニティ施設。

音楽スタジオ、アートスタジオを併設しており、大人の初心者のために、指一本から始めるピアノ教室、鼻歌でつくったメロディをプロがアレンジし、本格的な作品に仕上げる等のサービスを提供する「ミュージック・コンシェルジュ」を実施している<sup>99</sup>。

### ④全国の温泉を高齢な芸術家のレジデンス施設に<sup>100</sup>

往年の文人墨客が逗留した客室や観光地は、現在では観光名所にもなっているところが多い。また現代においては、昔の文豪が温泉宿に籠もったように、田舎町で長期滞在しながら文芸執筆に挑戦しようというプロジェクトが、クラウド・ファンディングで目標金額を達成するという事例も登場している<sup>101</sup>。

一方で、公益財団法人セゾン文化財団の「サバティカル（休暇・充電）」<sup>102</sup>は、劇作家、演出家または振付家がサバティカル（休暇・充電）期間を設け、海外の文化やさまざまな芸術に触れてもらうことを目的としたプログラムである。

そこで、こうした先進的なプログラムをもとに、①一般的なアーティスト・イン・レジデンスが創作活動のための滞在であるのに対して、「逆転の発想」で、特に高齢の芸術家を対象として「芸術家を休んでもらう」ことを目的として、②舞台芸術分野だけでなく、美術、音楽、文学

等、文化芸術全般のアーティストを対象に、③セゾン文化財団の助成が主に海外での充電を対象としているのに対して国内の施設での充電を対象とする、新しい助成プログラムを創設することを提案したい。

宿泊場所は、地方自治体（公共の宿、空き家、等）または民間企業（温泉宿、等）が提供するものと想定している。

滞在のための経費（生活費、文化活動費等）は、基本的に地元から提供されることを前提とするが、税金を投入するのではなく、クラウド・ファンディングと組み合わせ、広く公募するものとし、資金が集まったプログラムから順次実施することを想定する。

また、滞在したいアーティストの選定と招へいしたい地域の公募を文化庁がコーディネートする、といった措置を行って、日本の温泉宿すべてをアーティスト・イン・レジデンス化することがひとつのアイデアとして考えられる。

このプログラムが軌道に乗れば、高齢者のアーティストは自己資金を必要とせず全国的温泉での逗留を楽しむことができるようになる。また、十数年後には「あの高名な〇〇氏が、晩年に長逗留した温泉宿」といった形で、新たな文化的名所が全国に誕生することになると期待される。

#### ⑥日本版 CCRC における「文化」プログラムの導入

「CCRC」とは、Continuing Care Retirement Communityの略語である。米国では、高齢者が移り住み、健康時から介護・医療が必要となる時期まで継続的なケアや生活支援サービス等を受けながら生涯学習や社会活動等に参加するような共同体、すなわち「CCRC」が約2,000カ所存在している、とのことである。こうした背景のもと日本において、都会の高齢者が地方に移り住み、健康状態に応じた継続的なケア環境のもとで、自立した社会生活を送ることができるような地域共同体（「日本版 CCRC」）について検討が進められている<sup>103</sup>。

2015年2月から首相官邸まち・ひと・しごと創生本部で「日本版 CCRC 構想有識者会議」（座長・増田寛也元総務相）が開催され、12月に「生涯活躍のまち」構想最

終報告」が公表されている。同報告において、「地方自治体に選定された運営推進法人は、自ら一定のサービス（医療・介護・住まい等）を提供することも想定される一方で、他の事業者と連携して各種サービス・プログラム（教育、スポーツ、社会参加、就労等）を提供することも想定される」（首相官邸2015：17）と記述されている。ただし、現案では「文化」についての記述はない。

今後は、日本版 CCRC において提供されるプログラムに関して、本稿で紹介したようなさまざまな Creative Aging 関連のサービスも提供の対象となるように政策的に誘導していくことが望ましい。

Creative Aging の推進のためには、この「オークフィールド八幡平」のように、文化芸術のプログラムを提供する CCRC の事例をよりいっそう増やしていくことが必要であろう。

なお、こうした施設への入居資金に関しては、さまざまな資金調達の仕組みが考えられる。たとえば、上述したようなクラウド・ファンディングも考えられるし、また、アーティストの作品や著作権等を担保とする「リバースモーゲージ」のような仕組みも考えられるであろう。その他として、地域における社会的課題を解決するという視点から、地方自治体がこの経費を負担することが望ましいとも考えられる。ただし、財政状況が厳しいことを勘案すると、プログラムが成功して成果が実現した場合にのみ地方自治体を経費を支払うという SIB (Social Impact Bond) についても、今後は導入を検討することが必要であろう。

#### ■「オークフィールド八幡平」（岩手県八幡平市）

実際、日本版 CCRC 構想を踏まえ、サービス付き高齢者向け住宅「オークフィールド八幡平」（岩手県八幡平市）が2015年12月に完成している。同施設は、ギャラリーや展示会などの芸術文化活動、その他の活動を柱として、高齢者にやりがいや生きがいを提供するとともに、高齢者が街の財産になる地方創生を目指すとのことである<sup>104</sup>。

■事例：国立芸術家の館 (La Maison nationale des artistes) (フランス)<sup>105</sup>

「国立芸術家の館」は、マドレーヌ・スミス・チャンピオン (Madeleine Smith-Champion) とジーン・スミス (Jeanne Smith) の姉妹によって1943年に州に残された遺産をもとに、1945年に整備された老人向けの施設である。

入居できる年齢は60歳以上の個人またはカップル(どちらかが60歳以上)<sup>106</sup>で、現在の入居者は75名であるが、特筆すべき点としてそのうちの半分は「かつてアーティストであった人」となっている。

部屋は全部で71室あり、そのうち66室はシングル(20～25㎡)、残り5室はカップルのためのダブル(33～35㎡)となっている<sup>107</sup>。料金は、71.56€/日(1ユーロ=120円で換算すると8,587円、年額約313万円)である。

また、近隣の学校においては、この館の入居者たちとの交流が教育プログラムに組み込まれている。

## ⑥介護報酬のクリエイティブな改定

「介護報酬」とは、介護保険が適用される介護サービスにおいて、そのサービスを提供した事業所・施設に対価として支払われる報酬のことである。居宅サービス12種類、施設サービス3種類、その他1種類の計16種類のサービスについて、利用者の要介護度やサービスにかかる時間別に、単価が定められている<sup>108</sup>。

介護報酬は3年ごとに改定され、直近では2015年度に改定されている。2015年度の改定では、高齢者ができる限り住み慣れた地域で尊厳を持って自分らしい生活を送ることができることを目的として、「活動と参加に焦点を当てたリハビリテーションの推進」が改定の大きな項目として掲げられている。

ただし、厚生労働省「平成27年度介護報酬改定の骨子」<sup>109</sup>という説明資料の中では、「文化」または「芸術」という単語は明示されていない。この「介護報酬」に関する資料において、文化芸術に関するリハビリテーションが

明示されることが、今後のCreative Agingの普及に大きく影響するものと考えられる。

また、こうした介護報酬の改定が実現すれば、上述した日本版CCRCにおいても、Creative Agingの活動がより一層進展することが期待される。

## ⑦福祉・介護予算の1%を文化芸術に

厚生労働省の2016年度(平成28年度)の予算は、総額で30兆3,110億円である。このうち、福祉等で3兆9,667億円、介護で2兆9,323億円となっており、福祉および介護等の合計で6兆8,990億円となっている。この福祉および介護予算のわずか1%だけでも、約690億円となる計算である。

一方、「世界に誇るべき『文化芸術立国』の実現」という勇ましいキャッチフレーズを掲げた文化庁の同年度の予算は、総額で1,039億6,500万円である。この数値から、「かけがえのない文化財の保存、活用及び継承等」(451億4,600万円)および「東日本大震災復興特別会計」(11億3,400万円)の合計を差し引くと、広義での現代の文化芸術のための予算として残るのは合計576億8,500万円となる。

つまり、福祉・介護予算のわずか1%(=約690億円)を文化予算に転換できれば、現時点における現代の文化芸術のための予算を2倍以上に増強することができるという計算になるのである。

実は、このような省庁の壁を越えた、政策の連携および資金の活用には実例がある。それは英国の「クリエイティブ産業」政策における事例である。この「クリエイティブ産業(Creative Industries)」とは、英国の文化・メディア・スポーツ省(Department for Culture Media and Sport; 以下、DCMS)によると、「個々人の創造性、技能、および才能に基づくものであり、知的財産の展開及び利用によって富と雇用を創出する可能性がある産業」と定義されている<sup>110</sup>。

太下(2009: 151-152)が明らかにした通り、実はDCMS自身は当初、クリエイティブ産業の振興に関する潤沢な予算を持っていたわけではない。しかし、広範か

つ主要な省庁と連携・調整することの副次的な効果として、DCMSでは他省の政策予算の中でクリエイティブ産業の振興のために活用できそうな資金の存在を明確化したのである。そして、当該政策の資金をクリエイティブ産業のために活用するためには、どのようなプロポーザルを実行すればよいのか等の条件を、他省へのロビイング活動を通じて確認した。このような調整によって集約される資金は、総額で7,000万£（1£＝200円で換算すると、約140億円）にも達するとのことである<sup>111</sup>。

こうした英国のクリエイティブ産業における事例は、「省庁間ファンドレイジング」とも呼べるのではないだろうか。日本の文化政策においても、こうした「省庁間ファンドレイジング」を実践し、他の政策分野と連携したCreative Aging政策を展開していくことが期待される。

そして、もしも上述した「介護報酬のクリエイティブな改定」と連動して福祉・介護予算の1%を文化芸術に確保することができれば、アーティストやクリエイターの新しい職能を開発することにもつながると期待される。また、遠くない将来に生じるであろう国民の負担増と給付減に備えるためには、高齢者が心身ともに健康である必要がある。高齢者がCreative Agingの活動を通じて心身ともに健康であることができれば、介護や医療の国民負担を大きく削減することもできると期待される。すなわち、文化は「積極的な福祉政策」になり得るのである。

#### ⑧ Creative Agingを2020オリンピックのレガシーに

周知の通り、2020年には東京でオリンピックが開催される。そして、オリンピックの開催にあたり、2012年のロンドン大会以降に極めて重視されているキーワードが「レガシー」という概念なのである。

IOCのパンフレット“OLYMPIC LEGACY 2013”によると、「レガシー」とは「スポーツだけではなく、社会、経済、環境の各面に関して、オリンピック開催都市に残され得る一連の利益であり、開会式前に経験されるものもあれば、大会終了後、数年を経過しても目に見えない可能性もある」（IOC 2013：8）と説明されている。なお、同資料において、「文化と教育は五輪大会にとって今まで

もずっと不可欠な要素であった」（IOC 2013：24）とも記述されている。

2012年のロンドン大会では、「レガシー」として、身体障害者およびその芸術表現に対する国民の考え方も変化が見られた、とされる<sup>112</sup>。実際、車椅子のダンサーであるスー・オースティンによるUnlimitedのプログラム“Flying Free”は、車椅子は行動の制約ではなく、むしろ限界のない（unlimited）自由の象徴のような印象を多くの人々に与えた。そして、Unlimitedは現在も継続的に実施されており、また、2020年東京大会にも文化プログラムとして継承される見込みである。

こうした障害者による芸術表現は確かに重要であり、2020年へ向けて日本でも実践すべきであるが、これはあくまでも2012年ロンドン大会のレガシーであり、2020年東京大会のレガシーとしては世界から認知されないという点に留意が必要である。すなわち、2020年へ向けて日本は障害者の芸術表現に取り組むと同時に、別の新しい社会課題に対応する文化プログラムを積極的に開拓することにより、日本独自のレガシーを追求すべきなのである。

こうした中、日本は世界最先端の高齢国家であるという事実を踏まえると、Creative Agingに関する取り組みを2020年オリンピック・文化プログラムのレガシーと位置づけることが望ましいのではないかと考えられる。

## 7 | おわりに

本稿においては、いまだかつて人類が体験したことがない速度と規模で高齢化が進展する事実を背景として、「老い」という現象と文化芸術の関係について、Creative Agingというキーワードをもとに考察を試みた。

社会が近代化してゆき、経済が高度に資本主義化されてきた人類の近過去の歴史においては、労働力と生産性を象徴する「若さ」が重視されてきた。換言すると、これまでの社会や経済においては、人間個人は詰まるところ、「労働力」としてとらえられてきたということでもある。

こうした中で、「老いること」は、けっして歓迎される

ことではなく、社会の中での「厄介な存在」であり、できれば回避したい「マイナス」の事象として見られるようになってきた。その代表的な事例が、「アンチ・エイジング」という概念およびその実践であろう。

しかし、真に成熟した社会というものは、個々人がいつまでも若い時分のようにあくせくと働き続けるのではなく、もっとのんびりと人生の豊潤さを積極的に開拓していくような社会なのではないだろうか。近年の超高齢化社会は、そのための転換をわれわれに促しているようにも感じられる。

周知の通り、この高齢化という社会的課題に関しては、日本は世界で最先端の課題先進国である。そして、もしも日本人が従来のような意識のままですと、日本は、年々人口が減っていき、従来重要だとみなされてきた“若々しさ”を失っていくという、今までの他の国・地域が経験したことのない、とても寂しい社会となってゆく懸念がある。

一方で、日本においては、「老いの文化」または「老いの美学」とでも呼ぶことができるような、ある種の文化的なレガシーが存在するように思う。

世阿弥の『風姿花伝』の最初の章となる「年来稽古の条々」において、自分の父・観阿弥が最晩年、死去のわずか15日前に舞った能について記述している箇所がある。それによると、その舞は「殊に花やか」であり、「花はいや増しに見え」たとのことであり、このことから世阿弥は「老木になるまで、花は散らで残りしなり」としている(世阿弥1991:22)。

また、世阿弥は『風姿花伝』の続編と言われる著書『至花道(しかどう)』において、「鬨位事(らんいのこと)」という章を設けている(世阿弥1931:63-66)。この「鬨位事」とは「鬨(た)けたる位(くらい)」のことであり、「修行を積んで至高の段階に達したのちの自在な芸の境地」<sup>113</sup>のことを意味している。ここにおいても、老いることはマイナスではなく、むしろ芸道においてはポジティブな要素であると世阿弥は論じている。すなわち能とは、演者が老いることを通じて、より華やかな芸術表現、す

なわち世阿弥の言う「花」の境地に到達することが可能な芸能なのである。その意味では、能とは「老いの芸能」であるとも言えよう。

また、能には「老女物」と呼ばれる、老女をシテとして、その老いを描く演目が存在する。さらに言えば、能楽の演目のひとつとして正月や祝賀、記念能等の番組の冒頭で演じられる「翁」(別名「式三番」)は、老体の神が祝福をもたらすという民俗信仰に関係するとのことである<sup>114</sup>。すなわち、そもそも能とは、その発祥から「老い」と深い関係にあった芸能なのである。

近年においては、100歳を超えてもなおも、老いた肉体をさらけ出すかのように舞台上に立ち続けた舞踏家・大野一雄の存在を挙げることができる。上述した通り、能が「老いの芸能」であるとする、大野の舞踏も日本の「老いの芸能」の系譜に連なる芸術表現であったと評価できる。

ただし、高齢のアーティストだけが特別な存在なのではない。本稿で考察してきた通り、高齢者が今までに歩んできた人生、それは社会のリアルな一断面であり、そのような、カラダに刻み込まれた歴史と記憶のことを、民俗学者であり、介護士でもある六車由実が「忘れられた日本人」に喩えている(六車2012:21-39)。そして、そうした経験を聞き書きすることは「社会において価値を失って無用のもののみなされてしまった『老い』に再び価値を見出していく行為」と位置づけている(六車2015:282)。

言うまでもなく、年齢を重ねるということは、人間として成熟することでもある。そして、経験を積み重ね、人生が深まった中で、若い時分には感じられなかったことが感じられるようになるはずである。このように、長い人生を生きてきた高齢者たちの醸し出す威厳や存在感は、世阿弥が記したように、「花」と呼べるものなのではないだろうか。

高度資本主義の終わりの始まりの時代に差し掛かった日本の社会は、一方で、「老い」の文化の遺伝子を継承する社会でもある。そして、高齢者だけの問題ではなく、すべての世代の人間にとって、「生きること」とは文字通りに日々「老いること」なのである。こうした日本であるか

からこそ、文化を通じて「若い」をしっかりと引き受ける成 言える。  
 熟した社会に転換していくことが今、求められていると

## 【注】

- <sup>1</sup> 国立社会保障・人口問題研究所Webサイト 〈<http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/newest04/con2h.html>〉
- <sup>2</sup> 内閣府男女共同参画局Webサイト 〈[http://www.gender.go.jp/about\\_danjo/whitepaper/h24/zentai/html/honpen/b1\\_s05\\_01.html](http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h24/zentai/html/honpen/b1_s05_01.html)〉
- <sup>3</sup> 内閣府Webサイト 〈[http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/html/zenbun/s1\\_2\\_6.html](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/html/zenbun/s1_2_6.html)〉
- <sup>4</sup> 公益財団法人 全国老人クラブ連合会Webサイト 〈<http://www.zenrouren.com/siryu/member27.html>〉
- <sup>5</sup> 内閣府Webサイト 〈[http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/html/zenbun/s1\\_2\\_6.html](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/html/zenbun/s1_2_6.html)〉
- <sup>6</sup> 内閣府「政府広報オンライン もし、家族や自分が認知症になったら 知っておきたい認知症のキホン」
- <sup>7</sup> 正常と認知症の間とも言える状態のこと。日常生活への影響はほとんどなく、認知症とは診断されない。
- <sup>8</sup> 内閣府Webサイト 〈<http://www.gov-online.go.jp/useful/article/201308/1.html>〉
- <sup>9</sup> 慶應義塾大学医学部Webサイト 〈[http://www.keio.ac.jp/ja/press\\_release/2015/osa3qr000000wfwb-att/20150529\\_02.pdf](http://www.keio.ac.jp/ja/press_release/2015/osa3qr000000wfwb-att/20150529_02.pdf)〉
- <sup>10</sup> 厚生労働省「全国健康福祉祭（ねんりんピック）の概要」 〈<http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/nenrin/gaiyo.html>〉
- <sup>11</sup> 内閣府Webサイト 〈[http://www8.cao.go.jp/kourei/program/kokusai\\_j/kokusai\\_j16.htm](http://www8.cao.go.jp/kourei/program/kokusai_j/kokusai_j16.htm)〉
- <sup>12</sup> 内閣府「高齢社会対策の大綱について」（平成8年7月5日閣議決定） 〈[http://www8.cao.go.jp/kourei/measure/taikou/a\\_7\\_1.htm#5](http://www8.cao.go.jp/kourei/measure/taikou/a_7_1.htm#5)〉
- <sup>13</sup> 内閣府Webサイト 〈<http://www8.cao.go.jp/kourei/program/madrid2002/plan2002.html>〉
- <sup>14</sup> Muse Company Webサイト 〈<http://www.musekk.co.jp/>〉
- <sup>15</sup> 福島県立博物館Webサイト 〈[http://www.general-museum.fks.ed.jp/01\\_exhibit/kikakuten/2005/170423\\_oi/oi.html](http://www.general-museum.fks.ed.jp/01_exhibit/kikakuten/2005/170423_oi/oi.html)〉
- <sup>16</sup> ボーダレス・アートミュージアムNO-MA Webサイト 〈<http://www.no-ma.jp/?p=2310>〉
- <sup>17</sup> ボーダレス・アートミュージアムNO-MA Webサイト 〈<http://www.no-ma.jp/?p=8888>〉
- <sup>18</sup> 川口市立アートギャラリー・アトリアWebサイト 〈<http://www.atlia.jp/book/book.php>〉
- <sup>19</sup> 豊川市桜ヶ丘ミュージアム『境界なきアート展 ～響きあうココロへ～』カタログ（2009年）
- <sup>20</sup> 豊川市Webサイト 〈<http://www.city.toyokawa.lg.jp/shisetsu/bunkakyoiku/sakuragaokamuseum/shupanbutsu/bijutsu/kyokainaki.html>〉
- <sup>21</sup> ギャラリー58Webサイト 〈<http://www.gallery-58.com/zenei-r70>〉
- <sup>22</sup> 瀬戸内国際芸術祭実行委員会「瀬戸内国際芸術祭2016 実施計画」（2015年）p.1
- <sup>23</sup> inner landscapes展カタログより
- <sup>24</sup> 鞆の津ミュージアムWebサイト 〈<http://abtm.jp/blog/313.html>〉
- <sup>25</sup> 保坂健二郎（2014）「Of the Old, With the Old, for the Old Art After Tatsumi Orimoto」  
 〈[https://www.jpff.go.jp/j/project/culture/exhibit/international/venezia-biennale/art/56/pdf/compe\\_r07.pdf](https://www.jpff.go.jp/j/project/culture/exhibit/international/venezia-biennale/art/56/pdf/compe_r07.pdf)〉
- <sup>26</sup> 秋田市 〈<http://www.city.akita.akita.jp/City/wf/lg/age-friendly/community/exhibition.htm>〉
- <sup>27</sup> 文部科学省「教育関係NPO事例集 vol.4 はぐくむ」 〈[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/ikusei/npn/npn-vol4/1317019.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/npn/npn-vol4/1317019.htm)〉
- <sup>28</sup> 一般社団法人アーツアライブWebサイト 〈<http://www.artsalivejp.org/about/activities.html>〉
- <sup>29</sup> フォーエバー現代美術館 〈<http://www.fmoca.com/about.html>〉
- <sup>30</sup> 「回想法」とは昔懐かしい生活用具等を用いて、かつて自分が経験したことを楽しみながら皆で語り合うことによって、脳を活性化させ、気持ち（心）を元気にする心理・社会的アプローチのこと。1963年、アメリカの医師ロバート・パトラーによって提唱された。回想法は、対人交流や情緒の活性化、高齢者のQOL（生活の質）向上等に効果があるといわれている。（北名古屋Webサイトより）
- <sup>31</sup> 北名古屋Webサイト 〈<http://www.city.kitanagoya.lg.jp/fukushi/3000067.php>〉
- <sup>32</sup> 北名古屋Webサイト 〈<http://www.city.kitanagoya.lg.jp/fukushi/3000068.php>〉
- <sup>33</sup> 文部科学省「博物館の設置及び運営上の望ましい基準の見直しについて これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議報告書」（2010年3月） 〈[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2011/11/15/1313173\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/11/15/1313173_01.pdf)〉
- <sup>34</sup> なお、その後2011年12月20日に「博物館の設置及び運営上の望ましい基準」（文部科学省告示第165号）が告示されている。
- <sup>35</sup> 八老劇団Webサイト 〈<http://hamada-sumiko.tee.jp/tuite/top-3.html>〉
- <sup>36</sup> 内閣府「平成16年版 国民生活白書」 〈[http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h16/01\\_honpen/hm41800.html](http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h16/01_honpen/hm41800.html)〉
- <sup>37</sup> 岩手県「全国生涯学習ネットワークフォーラム2013岩手大会ポスターセッション資料」  
 〈<http://www2.pref.iwate.jp/~hp1595/zenkokuNF/15nisiwaga.pdf>〉
- <sup>38</sup> 総務省Webサイト 〈[http://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/jichi\\_gyousei/c-gyousei/2008/pdf/081222\\_1\\_1g.pdf](http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/2008/pdf/081222_1_1g.pdf)〉
- <sup>39</sup> 埼玉県芸術文化振興財団Webサイト 〈[http://www.saf.or.jp/gold\\_theater/about/index.html](http://www.saf.or.jp/gold_theater/about/index.html)〉
- <sup>40</sup> 埼玉県・彩の国ニュース 〈<https://www.pref.saitama.lg.jp/a0301/sainokuni-news/sn2014121901.html>〉
- <sup>41</sup> 国際交流基金Webサイト 〈[http://www.performingarts.jp/J/art\\_interview/0910/3.html](http://www.performingarts.jp/J/art_interview/0910/3.html)〉
- <sup>42</sup> 本稿執筆中の2016年5月12日、蜷川幸雄氏はご逝去されました。安らかにご永眠されます様、お祈り致します。
- <sup>43</sup> フェスティバル/トーキョーWebサイト 〈[http://www.festival-tokyo.jp/10/program/cafe\\_rottenmeier/](http://www.festival-tokyo.jp/10/program/cafe_rottenmeier/)〉
- <sup>44</sup> 財団法人地域創造「地域における文化・芸術活動の行政効果 文化・芸術を活用した地域活性化に関する調査研究報告書」（2012年）別冊資料集、P.244 〈[http://www.jafra.or.jp/j/library/investigation/22-23/data/22-23\\_2.pdf](http://www.jafra.or.jp/j/library/investigation/22-23/data/22-23_2.pdf)〉
- <sup>45</sup> 座・たくあんWebサイト 〈<http://www8.plala.or.jp/sunko/F2.htm>〉

- <sup>46</sup> 特定非営利活動法人発起塾Webサイト 〈<http://www.hokkijuku.net/hokkijukutoha%20new.html>〉
- <sup>47</sup> 可児市文化創造センターWebサイト 〈[http://www.kpac.or.jp/topics/detail\\_515.html](http://www.kpac.or.jp/topics/detail_515.html)〉
- <sup>48</sup> 新潟市Webサイト 〈<https://www.city.niigata.lg.jp/iryoo/korei/oshirase/sohodoritaisoh.html>〉
- <sup>49</sup> 北九州芸術劇場 〈<http://www.kitakyushu-performingartscenter.or.jp/event/2012/0302kioku.html>〉
- <sup>50</sup> TEAM SPOT JUMBLE Webサイト 〈<http://teamspotjumble.ti-da.net/e8347051.html>〉
- <sup>51</sup> 国際交流基金Webサイト 〈[http://www.performingarts.jp/J/art\\_interview/0910/3.html](http://www.performingarts.jp/J/art_interview/0910/3.html)〉
- <sup>52</sup> 東京都合唱連盟Webサイト 〈<http://tokyochorus.com/event/silver/>〉
- <sup>53</sup> 文化審議会文化政策部会 報告書「地域文化で日本を元気にしよう！」(2005年)  
〈[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/bunka/toushin/05021601/006.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/05021601/006.htm)〉
- <sup>54</sup> 野村誠「野村誠年表」〈<http://www.makotonomura.net/blog/bio-2/chronicle/?lang=ja>〉
- <sup>55</sup> 熊倉敬聡「『わいわい音頭』——野村誠と老人たちの愉快的『作曲』」.『10+1』NO.18. 1999.  
〈<http://db.10plus1.jp/backnumber/article/articleid/918/>〉
- <sup>56</sup> Ibid.
- <sup>57</sup> Ibid.
- <sup>58</sup> 音無美紀子の歌声喫茶 〈<http://otonashi-utagoe.jp/about.htm>〉
- <sup>59</sup> 日本経済新聞 (2016年4月5日) 〈[http://www.nikkei.com/article/DGXLASDG05H48\\_V00C16A4CR8000/](http://www.nikkei.com/article/DGXLASDG05H48_V00C16A4CR8000/)〉
- <sup>60</sup> Wikipedia「加藤廣」より
- <sup>61</sup> J-CASTニュース (2013年1月16日) 〈<http://www.j-cast.com/2013/01/16161518.html>〉
- <sup>62</sup> Wikipedia「恍惚の人」より
- <sup>63</sup> Wikipedia「佐江衆一」より
- <sup>64</sup> 水村美苗Webサイト 〈<http://mizumuraminae.com/biography.html>〉
- <sup>65</sup> 紡ぎ屋Webサイト 〈<http://1000gen.com/tsumugiya/index.html>〉
- <sup>66</sup> フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) 』
- <sup>67</sup> 室生犀星「俳句は老人文学ではない」(青空文庫) 〈[http://www.aozora.gr.jp/cards/001579/files/53538\\_56969.html](http://www.aozora.gr.jp/cards/001579/files/53538_56969.html)〉
- <sup>68</sup> 日本新聞協会「各国別日刊紙の発行部数、発行紙数、成人人口千人当たり部数」  
〈<http://www.pressnet.or.jp/data/circulation/circulation04.html>〉
- <sup>69</sup> 現代俳句協会Webサイト (松田ひろむ「俳句入門」) 〈<http://www.gendaihaiku.gr.jp/nyumon/index.cgi>〉
- <sup>70</sup> 現代俳句大事典 三省堂、2005、「結社」の項
- <sup>71</sup> 独立行政法人国民生活センター「報道発表資料 高齢者をねらう、短歌・俳句の新聞掲載への電話勧誘」  
〈[http://www.kokusen.go.jp/pdf/n-20100407\\_1.pdf](http://www.kokusen.go.jp/pdf/n-20100407_1.pdf)〉
- <sup>72</sup> Wikipedia「八月の鯨」より
- <sup>73</sup> Wikipedia「黄昏 (1981年の映画)」より
- <sup>74</sup> ホワイトハウス会議の高齢化以外のテーマとしては、教育、公民権、家庭生活、障害者、栄養、薬物濫用等がある。ホワイトハウス会議の典型的な出席者は、個別分野の専門家、テーマとなった問題に関係するコミュニティリーダーおよび市民等である。大統領は同会議のGeneral Session (全員が参加する基調講演) でスピーチをすることが多い。また、合衆国のファーストレディが時々ホワイトハウス会議を主催することもある。同会議は1日で終わる会議もあれば、数日間続く会議もある。そして同会議は、大統領行政府に対する勧告または法的措置の推奨を含めて、大統領へ向けて論点をとりまとめた報告書を発行することで閉幕となる。そして、ホワイトハウス会議の成果として、だいたい特別法が立法されることとなる。最初のホワイトハウス会議は扶養児童の養育に関する会議で、セオドアローズヴェルト大統領の時代の1909年に開催された。それは後に「白亜館児童会議 (White House Conference on Children and Youth)」となった。この最初の会議では、育児放棄または扶養児童のための制度化および連邦児童福祉局 (Children's Bureau) の新設が繰り返し勧告された。(Wikipediaより)
- <sup>75</sup> その他の2つは、「医療におけるアート (Arts in Healthcare)」と「障害を持つ人のためのアート (Careers in the Arts)」。
- <sup>76</sup> 米国大統領リンカーンが1863年11月にペンシルベニア州ゲティスバーグで行った演説。
- <sup>77</sup> NEA Webサイト 〈<https://www.arts.gov/accessibility/accessibility-resources/leadership-initiatives/arts-aging/>〉
- <sup>78</sup> NEA .The Impact of Professionally Conducted Cultural Programs on Older Adults Final Report.2006  
〈<https://www.arts.gov/sites/default/files/CnA-Rep4-30-06.pdf>〉
- <sup>79</sup> 本要覧に掲載されているプログラムは、それぞれの成熟度によって次の3つのタイプに分類されている。①包括的な調査研究により有効性が確認されたプログラム、②複数の資料でその有効性が確認されているプログラム、③ベストプラクティスとなる前段階のプログラム。
- <sup>80</sup> NCCA Webサイト 〈<http://www.creativeaging.org/programs-people/cad>〉
- <sup>81</sup> ESTA Webサイト 〈<http://www.estanyc.org/index.php>〉
- <sup>82</sup> 各州が策定するカリキュラムスタンダード (学習指導要領のようなもの)
- <sup>83</sup> ブリティッシュカウンシルWebサイト 〈<https://www.britishcouncil.jp/programmes/arts/ageing-society/japan-study-tour-2015/case-study>〉
- <sup>84</sup> スコットランド国立公文書館Webサイト 〈<http://www.nrscotland.gov.uk/files/statistics/high-level-summary/j11198/j1119802.htm>〉
- <sup>85</sup> Scottish Poetry Library Webサイト 〈<https://akitahaiku.com/tag/the-scottish-poetry-library/>〉
- <sup>86</sup> クリエイティブ・スコットランドへのインタビュー調査 (2015年10月26日)
- <sup>87</sup> Director of Luminare、Anne Gallacher氏へのヒアリング調査 (2015年10月27日)
- <sup>88</sup> Laminare Webサイト 〈<http://www.luminatescotland.org/luminare-photography-challenge-%E2%80%93-online-exhibition>〉

- <sup>89</sup> Luminate Webサイト  
 〈<http://www.luminatescotland.org/events/senior-moments-portraits-and-memories-members-castlemilk-seniors-centre>〉
- <sup>90</sup> Bealtaine Festival Webサイト 〈<http://bealtaine.com/>〉
- <sup>91</sup> Bealtaine Festival Webサイト 〈<http://bealtaine.com/what-bealtaine>〉
- <sup>92</sup> Bealtaine Festival Webサイト 〈<http://bealtaine.com/ambassadors>〉
- <sup>93</sup> National Museums Liverpool “House of Memories”  
 〈<http://www.liverpoolmuseums.org.uk/learning/projects/house-of-memories/index.aspx>〉
- <sup>94</sup> National Museums Liverpool “House of Memories”  
 〈<http://www.liverpoolmuseums.org.uk/learning/projects/house-of-memories/resources.aspx>〉
- <sup>95</sup> National Museums Liverpool “House of Memories”  
 〈<http://www.liverpoolmuseums.org.uk/learning/projects/house-of-memories/awards.aspx>〉
- <sup>96</sup> アートミーツケア学会Webサイト 〈<http://popo.or.jp/artmeetscare/about/about.html>〉
- <sup>97</sup> LATA65 Facebook  
 〈[https://www.facebook.com/Lata65#!/Lata65/?tab=page\\_info#!/Lata65/?tab=overview#!/Lata65/?tab=overview#!/Lata65/info/](https://www.facebook.com/Lata65#!/Lata65/?tab=page_info#!/Lata65/?tab=overview#!/Lata65/?tab=overview#!/Lata65/info/)〉
- <sup>98</sup> 文部科学省Webサイト 〈[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/01\\_/08052911/001.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/01_/08052911/001.htm)〉
- <sup>99</sup> Conti多摩センターWebサイト 〈<http://www.conti.jp/about/>〉
- <sup>100</sup> この提案は、太下義之 (2014) 「Design for Future From 2020 to 22th 2020年および2020年以降を見据えた文化振興方策」からの転用。
- <sup>101</sup> 「北海道にヶ月 昔の文豪みたいに長逗留して新作を書きたいプロジェクト」 〈<http://camp-fire.jp/projects/view/890>〉
- <sup>102</sup> 公益財団法人セゾン文化財団Webサイト 〈<http://www.saison.or.jp/application/01a.html>〉
- <sup>103</sup> 首相官邸まち・ひと・しごと創生本部「資料2 日本版CCRC構想を巡る状況」  
 〈<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/meeting/ccrc/h27-02-25-siryoku2.pdf>〉
- <sup>104</sup> 盛岡経済新聞 (2016年2月4日) 〈<http://morioka.keizai.biz/headline/2028/>〉
- <sup>105</sup> Frédéric Mitterrand visite la Maison nationale des artistes Webサイト  
 〈<http://www.culturecommunication.gouv.fr/Ministere/Histoire-du-ministere/Ressources-documentaires/Discours/Discours-de-ministres-depuis-1999/Frederic-Mitterrand-2009-2012/Articles-2009-2012/Frederic-Mitterrand-visite-la-Maison-nationale-des-artistes>〉
- <sup>106</sup> Maison Nationale des Artistes Webサイト 〈<http://mna.fnagp.fr/page/conditions-et-procedures>〉
- <sup>107</sup> Maison Nationale des Artistes Webサイト 〈<http://mna.fnagp.fr/page/chambres>〉
- <sup>108</sup> Wikipedia「介護報酬」より
- <sup>109</sup> 厚生労働省「平成27年度介護報酬改定の骨子」 〈<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/0000081007.pdf>〉
- <sup>110</sup> DCMS Webサイト 〈[http://www.culture.gov.uk/about\\_us/creative\\_industries/default.aspx](http://www.culture.gov.uk/about_us/creative_industries/default.aspx)〉
- <sup>111</sup> DCMSへのヒアリング調査 (2009年3月実施)
- <sup>112</sup> Unlimited, Ms. Jo Verrntへのヒアリング調査 (2014年10月、ロンドン市内で実施)
- <sup>113</sup> 出所：デジタル大辞泉
- <sup>114</sup> 独立行政法人日本芸術文化振興会「能楽への誘い」 〈[http://www2.ntj.jac.go.jp/unesco/noh/jp/noh\\_plays/okina.html](http://www2.ntj.jac.go.jp/unesco/noh/jp/noh_plays/okina.html)〉

## 【参考文献】

- ・ Department of Health. (2009). Living well with dementia:A National Dementia Strategy.  
 〈[https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment\\_data/file/168220/dh\\_094051.pdf](https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/168220/dh_094051.pdf)〉 (参照2016-05-12).
- ・ Impact Arts. (2011). Social Return on Investment Evaluation.  
 〈<http://www.impactarts.co.uk/content/resources/Craft-Cafe-SROI-Summary.pdf>〉 (参照2016-05-12).
- ・ Impact Arts. (2015). ANNUAL REPORT 2014/2015.  
 〈<http://www.impactarts.co.uk/content/resources/Annual-Report-2015-Final.pdf>〉 (参照2016-05-12).
- ・ IOC (2013). OLYMPIC LEGACY 2013.  
 〈[http://www.olympic.org/Documents/Olympism\\_in\\_action/Legacy/2013\\_Booklet\\_Legacy.pdf](http://www.olympic.org/Documents/Olympism_in_action/Legacy/2013_Booklet_Legacy.pdf)〉 (参照2015-04-07).
- ・ Luminate. (2015). SCOTLAND’S CREATIVE AGEING FESTIVAL.
- ・ Áine Ní Léime & Eamon O’Shea. (2009). The Bealtaine Festival A Celebration of Older People in the Arts.  
 〈[http://www.icsg.ie/sites/www.icsg.ie/files/personfiles/bealtaine\\_evaluation\\_full\\_1\\_aine.pdf](http://www.icsg.ie/sites/www.icsg.ie/files/personfiles/bealtaine_evaluation_full_1_aine.pdf)〉 (参照2016-05-12).
- ・ National Endowment for the Arts (2006). The Impact of Professionally Conducted Cultural Programs on Older Adults Final Report.  
 〈<https://www.arts.gov/sites/default/files/CnA-Rep4-30-06.pdf>〉 (参照2016-05-12).
- ・ National Museums Liverpool. (2014). An Evaluation of House of Memories Dementia Training Programme:Midlands Model.  
 〈<http://www.liverpoolmuseums.org.uk/learning/documents/house-of-memories-midlands-evaluation-2014.pdf>〉 (参照2016-05-12).
- ・ Yang, Y. C., Boen, C., Gerken, K., Li, T., Schorpp, K., & Harris, K. M. (2016). Social relationships and physiological determinants of longevity across the human life span. Proceedings of the National Academy of Sciences, 113(3), 578-583.
- ・ 朝田隆 (2013). 『都市部における認知症有病率と認知症の生活機能障害への対応 総合研究報告書』(厚生労働科学研究費補助金 認知症対策総合研究事業). 〈[http://www.tsukuba-psychiatry.com/wp-content/uploads/2013/06/H24Report\\_Part1.pdf](http://www.tsukuba-psychiatry.com/wp-content/uploads/2013/06/H24Report_Part1.pdf)〉 (参照2016-05-12).
- ・ 朝日恵子 (2011). 「シニア演劇の現状報告」(特集 シニア演劇の時代へ—表現する市民の広がり). 上方芸能、(179)、pp11-17.
- ・ 阿部彩 (2014). 「包摂社会の中の社会的孤立」. 社会科学研究 第65巻 第1号. pp13-29.

- ・江澤和雄 (2013). 「『超高齢社会』における高齢者の学習支援の課題」. レファレンス2013. 8, pp1-33.  
 〈[http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_8276393\\_po\\_075101.pdf?contentNo=1](http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_8276393_po_075101.pdf?contentNo=1)〉 (参照2016-05-12).
- ・太下義之 (2009). 「英国の『クリエイティブ産業』政策に関する研究」(特集 技術・産業のフロンティア). 季刊政策・経営研究. 2009(3). 119-158.
- ・太下義之 (2014a). 「国際的な文化事業による創造的な都市・地域整備に関する研究: 「『欧州文化首都』から『東アジア文化都市』へ」. 季刊政策・経営研究. 2014(2). 171-193.  
 〈[http://www.murc.jp/thinktank/rc/quarterly/quarterly\\_detail/201402\\_171.pdf](http://www.murc.jp/thinktank/rc/quarterly/quarterly_detail/201402_171.pdf)〉 (参照2016-05-12).
- ・太下義之 (2014b). 「Design for Future From 2020 to 22th 2020年および2020年以降を見据えた文化振興方策」  
 〈[http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/seisaku/12/02/pdf/shiryu\\_1.pdf](http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/seisaku/12/02/pdf/shiryu_1.pdf)〉 (参照2016-05-12).
- ・大竹文雄 & 小原美紀 (2016). 「高齢者の貧困がなぜ注目されるのか」. 中央公論2016年3月号. pp86-93.
- ・北名古屋歴史民俗資料館 (2015). 『昭和日常博物館ワークショップ小論』.
- ・熊倉純子 (2014). 『アートプロジェクト: 芸術と共創する社会』. 水曜社.
- ・熊倉敬聡 (1999). 「『わいわい音頭』——野村誠と老人たちの愉快的『作曲』」. 『10+1』 NO.18.  
 〈<http://db.10plus1.jp/backnumber/article/articleid/918/>〉 (参照2016-05-12).
- ・公益財団法人全国老人クラブ連合会 (2014). 『100万人会員増強運動』.  
 〈[http://www.zenrouren.com/100/pdf/140314\\_2.pdf](http://www.zenrouren.com/100/pdf/140314_2.pdf)〉 (参照2016-05-12).
- ・公益財団法人東京都医学総合研究所 (2013). 『認知症国家戦略の国際動向とそれに基づくサービスモデルの国際比較研究報告書』.  
 〈[http://www.igakuken.or.jp/mental-health/dementiasymposium/research/gakujuetsu\\_syukai/g\\_syukai130129/pdf/h24-NationalDementiaStrategy.pdf](http://www.igakuken.or.jp/mental-health/dementiasymposium/research/gakujuetsu_syukai/g_syukai130129/pdf/h24-NationalDementiaStrategy.pdf)〉 (参照2016-05-12).
- ・厚生労働省 (2015). 『平成27年度介護報酬改定の骨子』.
- ・首相官邸まち・ひと・しごと創生本部 (2015). 『『生涯活躍のまち』構想最終報告』.  
 〈<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/meeting/cerc/h27-12-11-saisyu.pdf>〉 (参照2016-05-12).
- ・世阿弥 (野上豊一郎 and 西尾実・校訂) (1991). 『風姿花伝』. 岩波文庫.
- ・世阿弥 (野上豊一郎・校訂) (1931). 『能作書・覚習条条・至花道書』. 岩波文庫.
- ・瀬戸内国際芸術祭実行委員会 (2015). 『瀬戸内国際芸術祭2016 実施計画』  
 〈[http://setouchi-artfest.jp/seto\\_system/fileclass/img.php?t=1449487054.383&fid=news\\_new\\_mst.20151110105027b7273a41de24c3396840071c6e69995a](http://setouchi-artfest.jp/seto_system/fileclass/img.php?t=1449487054.383&fid=news_new_mst.20151110105027b7273a41de24c3396840071c6e69995a)〉 (参照2016-05-12).
- ・瀬の津ミュージアム (2015). 『シルバーアート — 老人芸術』. 朝日出版社.
- ・内閣府 (2012). 『平成24年版 男女共同参画白書』.
- ・内閣府 (2015). 『平成27年版高齢社会白書』.
- ・中島正博 (2012). 「過疎高齢化地域における瀬戸内国際芸術祭と地域づくり アートプロジェクトによる地域活性化と人びとの生活の質」. 広島国際研究18. 広島市立大学国際学部 pp71-89. 〈<http://ci.nii.ac.jp/naid/120005402159/>〉 (参照2016-05-12).
- ・中島正博 (2014). 「過疎高齢化する離島のまちづくりと芸術祭: 瀬戸内・木木島の再生へ向けた住民の活動」. 広島国際研究20. pp93-104.  
 〈<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hiroshima-cu/metadata/12222>〉 (参照2016-05-12).
- ・永田耕衣 (1996). 「虚空生口上」. 『虚空に遊ぶ 俳人 永田耕衣の世界 図録』. 姫路文学館.
- ・長畑実 and 枝廣可奈子 (2010). 「現代アートを活用した地域の再生・創造に関する研究—直島アートプロジェクトを事例として」. 大学教育. 山口大学大学教育機構. pp131-143. 〈<http://ci.nii.ac.jp/naid/40017226405/>〉 (参照2016-05-12).
- ・西村和泉 (2012). 「結びのパラドクス『ゴドーを待ちながら』における執筆の軌跡をめぐって」. 岡室美奈子・川島健・長島確編『サミュエル・ベケット! — これからの批評—』水声社. pp23-51.
- ・二宮利治 (2015). 『日本における認知症の高齢者人口の将来推計に関する研究 平成 26年度厚生労働科学特別研究 研究成果報告書』.  
 〈<https://mhlw-grants.niph.go.jp/niph/search/NIDD00.do?resrchNum=201405037A>〉 (参照2016-05-12).
- ・藤田孝典 (2015). 『下流老人』. 朝日新書.
- ・藤田直哉 (2014). 「すばるクリティーク 前衛のゾンビたち: 地域アートの諸問題」. すばる. 36(10). pp240-253.
- ・ブリティッシュ・カウンシル (2015). 『高齢社会における文化芸術の可能性』.
- ・文化庁 (2005). 『文化審議会文化政策部会 報告書 「地域文化で日本を元気にしよう!」』.  
 〈[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/bunka/toushin/05021601/006.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/05021601/006.htm)〉 (参照2016-05-12).
- ・保坂健二郎 (2014). 「Of the Old, With the Old, for the Old Art After Tatsumi Orimoto」.  
 〈[https://www.jpff.go.jp/j/project/culture/exhibit/international/venezia-biennale/art/56/pdf/compe\\_r07.pdf](https://www.jpff.go.jp/j/project/culture/exhibit/international/venezia-biennale/art/56/pdf/compe_r07.pdf)〉 (参照2016-05-12).
- ・松尾芭蕉 (萩原恭男・校注) (1976). 『芭蕉書簡集』. 岩波文庫. 318.
- ・松原新一, 磯田光一, and 秋山駿 (1979). 『増補改訂戦後日本文学史・年表』. 講談社.
- ・六車由実 (2012). 『驚きの介護民俗学』. 医学書院.
- ・六車由実 (2015). 『介護民俗学へようこそ!』. 新潮社.
- ・吉本光宏 (2011). 「高齢者の潜在力を引き出すアートのポテンシャル—アートが拓く超高齢社会の可能性」. ニッセイ基礎研究所 No.11-009 01 December 2011. pp1-15. 〈[http://www.nli-research.co.jp/files/topics/39569\\_ext\\_18\\_0.pdf](http://www.nli-research.co.jp/files/topics/39569_ext_18_0.pdf)〉 (参照2016-05-12).